SUMMER WARS2 -新たなる脅威-

鉄コン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＵＭＭＥＲ　ＷＡＲＳ２　－新たなる脅威－

【Ｎコード】
Ｎ０４９４Ｌ

【作者名】
鉄コン

【あらすじ】
ラヴマシーン事件から一年がたとうとしていた。
健二と佐久間はＯＺのシステムエンジニアに夏希は大学へ進学・・・・・
ではなく特別留年をして、学校に残っていた。　あの事件が嘘のように、
問題なく三人は生活していた。
だが、彼らはまた、巻き込まれることとなる。あの戦争に・・・・

プロローグ（前書き）

この作品はサマーウォーズの二次創作です。このような、ものが苦手な方は、遠慮しても、構いません。

プロローグ

神様というのはいるのだろうか？　もし、いるのだとしたら相当な意地悪な人（？）だ。
だって、僕はほんの冗談に過ぎなかったんだ。　ほんの軽い気持ちでしかなかったんだ。　　そんなことは一億分のいや、一兆分のいや数では表せないくらいおきてほしいとは思っていなかった。そして、ぼくは、いや、僕たちはまた、新たなる戦争に巻き込まれることとなる。

そう、これは僕に起こった2回目のとんでもない夏休み・・・・

ＳＵＭＭＥＲ　ＷＡＲＳ２－新たなる脅威－

プロローグ（後書き）

どうでしたか？ちなみに、作者は、未成年です。つまり、文章力が皆無に等しいので
駄文になってしまうかと、思いますが、それでも頑張って書きますのでご感想を、よろしくお願いします。
P．S
もし、文字間違い等などがあったら、感想のほうにかいてください。

第一部　日常　第一章（前書き）

ぼうや「さて始まります。サマーウォーズ2よろしくお願いします」
健二「大丈夫かな～」佐久間「全くだ作者は初めは張り切るタイプだもんな～」
ぼうや「言うなーーーーー！！！」

第一部　日常　第一章

あの事件から一年が経とうとしているんだな・・・・
健二はそなことを思いながら、授業を受けていた。
◇
そう、一年前ＯＺがラヴマシーンに乗っ取られ世界は一時崩壊寸前まで追いやられた。
健二たちはラヴマシーンと対決し、勝利し世界は救われた。　健二たちの活躍は瞬く間にマスコミを騒がせた。　以後、この戦いのことを「サマーウォーズ」と呼ばれるようになり、あっという間に健二、佐久間、夏希、陣内家は有名になっていたのである
◇
キ～ン　コ～ン　カ～ン　コ～ン
チャイムが鳴った。どうやら授業が終わったようだ。　健二はいつものように、部室へ行った。
「来たか、健二、早速やるぞ」「はいはい」　あの事件以後健二たちはオフィシャルエンジニアとしてＯＺで働いているもちろん高校生の立場は特別優遇だが。健二は暗号課へ佐久間はラヴマシーンの様な障害が出できた時の防御ＡＩなどを作るハッカー対策課に入っていた。
「健二おまえの考え出した数式暗号随分凄ぇって噂だぞ」「本当！？」
「ああ、何でも全体の半分以上がお前１人でやってるようなもんだって暗号課の人に言われたからな」
健二は喜んでいた。そんな、健二を後ろから「良かったね」と脅かしてで出来たのは夏希だった。
「な、夏希先輩」「も～う先輩はよしてよクラスメートなんだから」
そう、夏希は留年していたのだ。無論大学には合格していた。しか

も、かなりの有名大学である。
なのに、なぜ夏希は留年を希望したか。それは、以前健二が数学オリンピックに出たのと同じような理由である。
「それじゃ、俺はお邪魔みたいなんで」そう言って佐久間は健二に「ごゆっくり」とつぶやいた。
嫌味な言い方である。　気が付くと、夏希と健二と2人きり・・・
健二は相変わらず目が合ったり
するとまともに話せないという位の上がりやである。
「健二君」「は、はい！」どうしても緊張してかしこまった返事になってしまう

「そんなに緊張しなくてもいいに～」「す、すみません・・」

いまやこんな会話も微笑ましいほど和んでいる。

「夏休み、良かったらまた家に来ない？佐久間君も一緒に」
「へ？」
「皆また健二君に会いたいって言ってね。それに佐久間君は面識はあるけど前回は家にいなかったし」「喜んで行きます！！」健二は元気に言った。
「ありがとう。それじゃ日時は、後で連絡するね。」
また、陣内家の人達に会えるんだ。楽しみだな～

第一部　日常　第一章（後書き）

さて、どでしょうかなるべく早いうちに続きを書くんでよろしくお願いします。

健二「ところで、」

ぼうや「ん？」

健二「夏希先輩の留年した理由って何ですか？」

ぼうや「あ～あそれは」

夏希「言っちゃダメー！！！」

パーーーン

竹刀で面を食らう音

ぼうや「痛ーーー」

第二章

健二は家に帰り早速、佐久間に連絡を取りＯＺに入った。
－ｌｏｇ ｉｎ－
「佐久間、夏休み空いてる？」「ＯＺの仕事はいつでも出来るからな～。特に用事はないけど」
ちょっと小太りのリス型アバターケンジと、ドットのようなサル形アバターサクマが話していた。

「じゃあ、夏希先輩の所に行かない？
「行く行く！！　考えてみれば実際には、まだ会ってないしな～」
そう、佐久間は、前回あの戦いには参加しているものの、ウィンド越しで実際にはまだ会っていないのである。
「それで日にちは？」

「まだ決まってない。分かり次第先輩が連絡をくれるって」

「了解」
二人が話をしてる間に、周りには相当の数のアバターが集まっていた。
「あちゃ～・・・」サクマはやってしまったと言わんばかりの表情をしていた。
◇
そう、２人はあの戦いで現実世界で随分と報道されたが、ＯＺでも相当報道されたのだ。
あの戦いが終わった、次の日は、「キングの相棒はなんとリス！」「ＯＺの管理棟を城のようにしたのはドットのサルだった！」「吉祥のナツキと謎のリス」挙句の果てには「サマーウォーズを戦ったアバター達」なんて、ものまであり目立ちまくっていたのだ。あの

事件以後、健二、夏希、佐久間、佳主馬を始めとする陣内家の全てのアバターが殿堂入りを果したのである。当然そんなアバターを野次馬がほうっておくはずもなく・・・・

◇

ワーワーワーと質問攻めに会った2人はログアウトして逃げてしまった。

－ｌｏｇ　ｏｕｔ－

今度は携帯に切り替えて話をしていた。

「とりあえず明日また」「おうそんじゃ」

2人は電話を切り明日の準備をして寝てしまった。

第三章（前書き）

昨日、サマーウォーズＢＤを買って、改めてサマーウォーズを見たのですが、やっぱり面白いです。それに作った人達の声が聞けるので実はこんな感じのこともやってた。なんてことも分かりサマーウォーズをさらに深く知れたと思います。

そして、ＢＤを見たことにより私自身もパワーをもらいました。今日は出来るだけ多く書いていこうと思います。

第三章

－ｌｏｇ　ｉｎ－
ｓｅｃｒｅｔ　ｓｅｃｕｒｉｔｙ　ｌｖ．１０
そうか書かれたとびらがある。そこはＯＺの最深部である。その奥は全世界のインターネットウィルスを管理する場所があるそれが、ウィルスシェルである。その場所は一般には公開されていない場所で、ＯＺのオフィシャルエンジニアでも上層部の者しか知らない場所である。本来はレベル１から９しかないのだが、危険すぎるウィルスは消去すらままならない。たとえ消去できたとしても再生能力があるため、しばらくすれば元通りになってしまう。そんな、ウィルスを管理しているのが、ここレベル１０である。
上層部のさらに上の者しかしらない。トップシークレットの場所である。当然こんな危険極まりないものを他のインターネットにおけるわけも無く、セキュリティ世界一のＯＺが管理しているのである。

「全くここはいつ来ても息が詰まるよ」「そう、言うな」
セキュリティの保守点検をしているアバター二体が呟いた。二体の目の前にゼリーのような物体があり、管理されていると言うより、閉じ込めているようだった。

「こんなものが、世に出たり、他の組織に流れたりでもすりゃ一年前どころの騒ぎじゃねえからな」

「あいよ」

ピーーーーー　ピーーーーー　ピーーーーー

サイレンが鳴った

侵入者発見　侵入者発見　直ちに防御体制に入れ　繰り返す　直ちに防御体制に入れ

「一年前の事件のおかげで楽に侵入できたな」

侵入した謎のアバターは警備のアバターを次から次へとなぎ倒し、セキュリティをも軽々と突破して行った。そして、とうとうレベル１０へ入っていった

「へーこれがインタネットで最初に出来たバグ。そして、最悪のバグ」

－ｌｏｇ　ｏｕｔ－

物語は少しづつ動く。そして、あの戦いへ彼らは巻き込まれていく。

第四章

翌日の放課後

◇

三人は昨日と同じで物理部の部室にいた。特別留年で夏希は剣道部から物理部に移動していた。

といってもメカが苦手な夏希が健二たちの手伝いが出来るはずも無く、茶を持ってきたり暇があれば、大学の勉強を健二たちに教えたりしていた。

だけど、それで健二も夏希も十分だった。２人でいられる時間や前よりも気兼ねなく話せる事が大切だった。佐久間からしたら一年も経ったんだしもうちょっと進展してもな～とおもうこともしばしばあった。でも、それが２人らしいといったら２人らしいんだけどなと思ってもいた。だが、内心は「いい加減キスぐらいしてもいいんだけど」とおもっているが。

「とりあえず八月一杯までなんだけど、大丈夫？」

どうやら昨日の話の続きをしているようだ。

「僕は大丈夫ですけど、佐久間は？」

「おれもＯＫだ」

「じゃあ決まりね八月一日に東京駅で待ち合わせね」

そう言いながら部室に入っていった。

「そういえば。もう一年も経つんですね。あの事件から」

「どうしたの急に？」

「いや、またあんな日々があっても悪くないかなと思って」

「え！」「おいおい」２人は驚きの目で健二のことを見た。

「いえ、またあんなふうに戦いたいなって意味で言ったんじゃないんです。ただ僕は」

健二は感慨深そうに言った。

「あの、戦いで本当に大切なことを色々と教わったんです。家族の大切さ、協力することの大切さ、本当に色々と教わったんです。それに・・・」

健二は夏希の方を少し見て目が合った

「ん？どうしたの」

「いえなんでもないです」健二は少し赤くなった顔を隠した。それを見た佐久間は、笑いながら言った

「正直に言えよ。夏希先輩が彼女になってくれて嬉しいですってさ」

「わわ、バカそういう意味じゃ」

そんな様子を見て夏希は顔を少し赤くしながら

「嬉しいな」と呟いた

「とにかく、夏希先輩の家族の皆さんにはお世話になりましたし、本当に大切なことを教えてくれたん　です。それに、先輩の家族の

皆さんと戦えたから弱虫だった自分を少し好きに慣れたし、少し強くなれたんです。だから、僕はたまにまたあんな日々も悪くないなって思ったんです」

「私もかな」「おれもですかね」

三人はハハハと笑った。　放課後のベルが鳴り三人はそれぞれ家へ帰っていった。

ピロン

携帯が鳴り健二にメールが来ていた。

「夏希先輩かな？」

あて先不明で内容にはこう書かれていた。

「マタ、センソウスル？」不気味な内容に健二は驚いた。それを見てすぐにそのメールを消去した。

「なんなんだ、あのメールは？」健二は少し不安げだった。

健二たちはまだ知らない。ほんの冗談つもりが本当に起こってしまうとは。このときはまだ夢にも思っていなかっただろう。

第四章（後書き）

とりあえず第一章から第四章までを第一部として区切りたいと思います。
第一部は一年前に起きた事件の後どんな風に生活しているかを書きたかったので書きました第二部は陣内家と健二たちの再会から敵との初接触までを予定しています。それで、次回は番外編としてラヴマシーンを倒してからすぐの話を書こうと思います。

番外編　長野（前書き）

映画の後日談という設定です。今健二が気絶している状況になっています。

鉄コン「お～～～い健二起きろ～～」

健二「・・・・・・・・・・」

鉄コン「本当に草食男子だな～まだ気絶してるよ」

番外編　長野

「あ、起きた？」
健二の目の前には夏希がいた。
「あれ？ここは？」
「健二君本当にああいうの苦手なんだね」
クスクス笑って見ている夏希を見て数分前のことを思い出して赤面した。
「あ、あの夏希先輩！」「ん？」
「あ、あのさっき僕にキ、キ、」「うん、キスしたよ」
嘘じゃない嘘じゃなかった嬉しいけど恥ずかしい様な何と言うか・・・・健二の心の中は混乱しかない
「健二君」「は、はい！」
「これからよろしくね」

ふっとなぜか健二は冷静になった。

「あの子をよろしく頼むよ」　「あんたならできるよ」

おばあちゃんとの約束があったんだ。おばあちゃん約束を今から守りますね。

決意を固めた健二はまっすぐな瞳で

「こちらこそよろしくお願いします」3日前フィアンセを無理に頼まれた時とは違う。今は健二自身が心から言える言葉である。

◇

日は暮れ、健二はここ長野で食べる最後の夕食を迎えるところだっ

た。
当然あの家は骨組みと枠組み以外ほとんどふっ飛んでしまい別の場所で宴会をすることになった。
弔いをするために来た客も集まった「どうせなら笑って見送ったほうが彼女のために良い」とゆうことで宴会と決まったのである。栄は皆から愛され尊敬されるいないな人であったのだ。それと一緒に健二と夏希を称えるための会もした。
「それじゃ、栄を見送って。そして、世界を救った英雄と俺達家族を救ってくれた英雄、二人の幸せを祈って乾杯」
「乾杯」夏希と健二の2人以外は大声で祝杯を上げたが2人は少し顔が赤かった。
宴会の声にまぎれて言い損ねたことを夏希は健二に言った
「健二君」「はい？」
「皆を守ってくれて本当にありがとう」
満面の笑顔でいった。か、かわいい・・・じゃなくてこっちもなんか言わなくちゃ
「いえ、世界中の人を守ってくれて世界を守ってくれて本当にありがとうございます」
こんな会話が少しつづいた。だがそれはほんの少しですぐに健二と夏希も宴会に加わった。
終始2人の関係をからかわれ早々にダウンした。飲めないのにお酒を飲まされたのだ。
夏希が最初に飲んだが、アルコールには弱くなんだかウキウキした様子で健二にからんで抱きついたりしたらしい。健二も少し飲んだがあっという間にダウン。まったくおにあいの2人である。

翌日の朝
「頭ががんがんするな～」「健二君起きた？」
「は、はい」ボーっとする頭を無理に起こして夏希の方に答えた。
「昼に帰るから、行っておきたい場所があるの来てくれる？」

夏希に言われるままについていったら朝顔畑が広がる平坦な道に着いた。だが健二はそこがどこだか分かった。健二はそこがどこだかすぐ分かった。
「ここ、栄おばあちゃんの遺言状に書かれていた場所ですね」「うん」
やはり2人とも栄の事が残っている様だ。夏希の目は少し潤んでいた。
「夏希先輩・・・」「大丈夫いつまでも泣いてたらそれこそ栄おばあちゃんに怒られちゃう」
「健二君、手を握って」健二は黙ってうなずき手を握った。

今、2人の間に絆ができた。それは、友情でも恋愛でもない。だが、それよりも大きく太い
「つながり」である。それがあったから、ラヴマシーンを倒せた。それがあったから健二は守りたい人達を守れた。もう絶対に消せないものである。
◇
時間が経ち家に戻ってきた二人を待っていたのはそれまでの良いふいんきをあっという間に壊す、物だった。2人は呆然と絶句の状態だった。
マスコミやら、新聞記者やらがどっと押し寄せているのである。
当然といえば当然である。ラヴマシーンとの戦いを制し世界を救っただけでなく、キング・カズマの
佳主馬ラヴマシーンの生みの親の侘助事件を終わらせた鍵といえる人物の当事者が全員いるうえ
挙句の果ては人工衛星が落下した場所なのだから。

「お、来た来た。こっち来い」皆に言われて急いで健二と夏希は行った。

それからは、とにかく質問攻めである。そして、その中で後に健二が大変なことになる質問が来る。
「健二君は陣内家の皆さんとどういったご関係なんですか？」
「え！え～と」口を濁す健二。フィアンセを頼まれて事件に居合わせたなんて言えるわけも無い。
「健二君は私の彼氏です！」「ななな夏希先輩！？」全国放送でしかも生中継なのに・・・・
健二は恥ずかしさで一杯だったのに
「別に隠すこと無いじゃん本当の事なんだから」「おうよ！俺達の命を救ってくれた大恩人よ。それを迎えないわけにはいかねぇだろ」
佳主馬と万助が横槍をいれる。
健二はただ呆然とたたずむしかなった。
◇
場所が変わり、久遠寺高校
「健二君とはどんな関係なんですか」「何であの場所に居合わせなかったんですか」
そんな、質問攻めにあっている人物がもう1人いた。
「一体どうなってんだ～～！」そう。佐久間である。
◇
マスコミの話も終わり、健二たちは帰るところである。
「それじゃ、一族を代表してお礼を言うわ。本当にありがとう」
万里子が礼を言った後一同が頭を下げた。
「そんな、礼を言うのはむしろ僕のほうですよ。皆さんと戦えたから、皆さんだったから弱虫だった自分をすこし好きになれたし、助けたい守りたいと思えたんです。本当にありがとうございました」
健二も頭を下げた。
「またいらっしゃい。いつでも歓迎するわよ」「また来いよ」「待ってるぞ」
本当にこの家族に支えられた。自分たちの未来をこのちっぽけな背中に預けてくれた。僕は、この夏を一生忘れない。

◇

ー新幹線ー

健二と夏希は隣に座っていた方が触れたりするとどうしても赤くなってしまう健二だが、最初よりずっと2人が近くなった感じだ。

「ふぅ〜」

「疲れました先輩？」

「うん。まあね。そういえば健二君青のときかっこ良かったよ」

「え！？」

少し顔が赤くなっている。

「私、参っちゃたもん」

「先輩も本当に凄かったです」

帰りの新幹線はこんな話が続いたが、やっぱり疲れ出たのか二人はすーすー寝てしまった。

肩を寄り添って。

番外編　長野（後書き）

次は帰ってきてからのお話です。高校で健二が待つものとは？

番外編　高校

ー始業式当日ー

◇

「佐久間ただいま」「おう、お帰り。ニュース見たぞ」そう、日本中にあのニュースは流れたのだ知らない人は、少なくともこの学校ではいないだろう。

「あれは、え～と、その・・・」健二は慌てている。

そんな様子は全く無視し呆れているのか面白そうにしているのか佐久間は言った。

「しっかし、たまげたわ、夏希先輩には。天然なんだなあんなにはっきりきっぱり言っちゃうなんて」

返す言葉がなった。確かにあそこまで平然と言ってのけられる人は夏希先輩くらいだろうな。

「それより健二、お前しばらくは、先輩の近くにいるかすぐ帰ったほうがいいぞ」

「え、何で？」「考えれば分かるだろ」

はっとなった健二は。夏希先輩本人は知らないようだが多くのファンがいるのだ。それをここにいる、皆からしたらひ弱で数学しかとりえの無い草食男子が出し抜いたとしたら必死は確定だ。

ちなみにこの場合の必死は。【必ず死ぬ】である。まずい。健二は果てしなくそう思った。

そうこうしている内に、鐘が鳴り学校が終わってしまった。健二の

周りにはたくさんの人だかりが出来ていた。逃げなきゃと思ったがそれはすぐに安堵に変わる。

「よ、有名人！」「ＯＺを救った英雄！」「夏希先輩の彼氏いや許婚さん！」

「いや、それは僕はたまたま居合わせてただけで、夏希先輩のことについてはなんていうか～その～」

赤面していた。どうもこの手のからかいは苦手らしい。

「お～い、健二お客さん」「お、噂をすればなんとやら嫁さんの登場だぜ！」

「健二君、一緒に部室に行こう！」「は、はい！」

◇

「ちょっと驚いちゃたな～皆の質問攻めには」

そう、当然健二のように夏希もあの事件についての事に聞かれていた。

「でも、ちょっと腹立っちゃうよ。皆健二君のことを誤解しすぎ。言いたい放題なんだよ」

プリプリ怒っていた。それもそのはずである。夏希にとって大切なものを全て守ってくれた。その健二に対しての悪口は腹立ち以外の何者でもないのである。

「健二君はカッコいいのに」先輩・・・声大きいですよ。

「俺もあの時のこいつには正直驚きましたよ。あんなに凄いことやらかすとは・・・」

「佐久間君だけだよ。健二君を理解してくれてるのは」
うんうんと夏希はうなずいた。健二を理解してくれる人がいるのは本当に嬉しいことなのだろう。

「そうだ、佐久間君、健二君て何がすきなの？」

「そうですね～。・・・・・・そう言や数学の話しかこの頃してないような」

「私、健二君の事何にも知らない」しょぼんとする夏希だが

「あれから、まだ数日しか経ってないですし、僕は先輩と一緒にいられるだけで嬉しいですよ」

「健二君・・・ありがとう」ラブラブのようである。2人はこのぐらいが丁度よい。

健二はいつもの様に下校していた。そう、できるはずだった。
恐ろしい殺気があったので振り返ってみると、健二の周りに上級生がたくさんいるのである。

pipipipipi

健二は佐久間に電話をした。
「あの、まわりに怖そうな人達が、この人達一体何？」

「あ～あ、それ？それはだなＫＫＫ団だな」

「ＫＫＫ団？そんな部活あったけ？」

「あのニュースが流れてから発足された。【小磯・健二を・殺すための・団】だそうだ。上級生男子は全員下級生は三分の二、二年生は三分の一入ったそうだ。だから気をつけろって言ったろう」

チラシが落ちていて拾ってみるとそこにはでかでかと赤い字で学校のアイドル篠原夏希を奪った小磯健二を殺そう。君も入ろうと書いてあった。

つっこみたいことは山ほどあったが、まず健二は聞かなければならない。

「とりあえず、佐久間？」

「ん？」

「佐久間はその団に？」

「・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・じゃ」

Ｐｉ

「さくまーーーーーーーーーーーーーー」

佐久間とは一度拳で語り合う必要がありそうだ。だが今はそんな事は問題ではない。

「ちょちょちょ皆さんまずは落ち着いてね？ね？」
健二の様子に全く反応せずまずいと思ったそのとき、彼の彼女は何をしているのかと思い手を振った。

「健二君ーーーーーーーー」うんイイ笑顔だ。

「わはははははははは」完全な苦笑いである。
クルっと回り急いで退避。その後ろからこの世のものとは思えないほどの地鳴り。

こおおおおおおいそおおおおおおおおおおお！！！！　とそれはもう猛然と。

「健二君どこ行くのーーーー？」

「僕にも分かりませんよーーーーーーー！！」

恋人が更なる拍車を掛けてくれるありがた～～～～い状況の中、どうやら健二にとって戦争は二度や三度じゃ終わらないようである。

番外編　完

番外編　高校（後書き）

どうでしたか、長野の方はともかく高校のほうは少し強引だったでしょうか。
感想どんどん送ってください。
そして今回協力してくださった、ダイちゃんさんにこの場で深く感謝します。
そして、いよいよ本連載が再開します。よろしくお願いします。
ところで、
鉄コン「おい健二ーーいつまで逃げてんだ～～！？」
健二「知りませんよ～～～！！」
鉄コン「あ、ＫＫＫ団の皆さんコイツ夏希さんの裸見てましたよ～」
ＫＫＫ団「何ーーーーーーーーー！！」
健二「わぁぁぁぁ何言ってんのお～～～～」
ＫＫＫ団「こおおおおおおおいそおおおおおおお」
健二「わああああああああああ」

第二部　再会　第五章（前書き）

ＧＷに早稲田松竹に行ってサマーウォーズと時をかける少女を見てきました。
最初は時かけはサマーウォーズの前座なんて考えていたんですけどどっちも本当に素晴らしくて感動して涙がでまくりでした。
それで、この連載が終わったらサマーウォーズと時をかける少女のコラボ作品を少し考えています。それと更新が少し遅れてすいません。

第二部　再会　第五章

―新幹線ホーム―
「お待たせ！待った？」
「いえ、僕らが早かったんです」
夏希の服装は一年前ここで会った時の服装だった。あの時はたくさんの荷物があったが、今回は・・・
前回以上にたくさんある。当然夏希が荷物を全部持つはずも無く、2人が荷物もちに回った。
相変わらずと言うより自然な感じである。

「ところで、陣内家の人ってどんな感じなんですか？」
前回いなかった佐久間からの質問に
「とにかく楽しい人達で、にぎやかっていうのかな」

新幹線内では佐久間の質問攻めだった。

―陣内家―

陣内家本家は相変わらずにぎやかなと言うより馬鹿でかかった。
健二は慣れていたから良かったが、佐久間は戸惑っていた。と言っても戸惑っていたのは最初の内で少し時間が経ったら溶け込んでいた。

親戚に挨拶を済ませ落ち着いてしばらくしてから仏壇に行った。
一番挨拶をしなければいけない人がいるからだ

―お久しぶりです。約束は今もまだちゃんと守っていますよ―

日が暮れまたあの宴会が始まろうとしていたが夏希がある人物がいないことに気付いた。
「あれ、侘助おじさんは？」
陣内侘助は前回の事件の元凶を作りまた解体した人物である。
「変ですね。来るってメールが来てたんですけど」
あの後健二は侘助と連絡をちょくちょく取っていた。
侘助は健二と佐久間がオフィシャルエンジニアに呼ばれたように侘助も呼ばれていた。
「やっぱりコアエンジニアだし忙しいのかな・・・」
「コアエンジニア？」パソコン関係に疎い夏希はよく分からない。

そんな夏希に佐久間が答えた。
「ＯＺのオフィシャルエンジニアは知ってますよね。オフィシャルエンジニアと一言に言っても階級があるんです」

佐久間の続きを健二が答える。
「まず先輩が以前バイトを頼む前に僕達がやってたＯＺの保守点検などの仕事を行ういわゆるバイトあれが一番下です。そして正規のオフィシャルエンジニア今の僕らで、一般の仕事から少し高度な物まで幅広く扱います。階級は真ん中くらいです。その上がコアエンジニアＯＺの重要度が高い所を点検、改良したりします。侘助さんがいるのがここで階級は上のほうです。そして、ＯＺでの一番階級が上の人達はコアエンジニアに指示を出したりします。上の階級になればなるほど秘密裏にしている仕事も回ってくるって噂です。説明長くなりましたけど大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫！」元気良く答えたが少し苦笑いが入っている。

「まあ、あいつが着いたら仕切りなおしでやりゃいいよ」万作がすぐに言った。

「それじゃ、いただきます」

宴会が始まった侘助が来たら今度はちゃんとして迎え入れてご飯を食べたかったのだが、陣内家は全員そう思っていた。
健二は今回はじめて会う人が2人いた甲子園球児の了平と去年生まれた佳主馬の妹である。

そして家族の中心の席は・・・・空席だった。
だが、佐久間含み誰一人としてその事には触れなかった。そんな事をして気分を盛り下げたりでもすればそれこそあの人に怒られてしまう。皆があの遺言を聞いたから、あの人を知っているからこそ、食事のときは楽しくしていた。

第二部　再会　第五章（後書き）

前書きに書いたのですが、実はコラボ作品はこの作品を書く前々から考えて痛んです。サマーウォーズとデ〇モンとロッ〇マンでインターネットで大戦争をする。
そんな、事を考えていました。ところが時かけをみてからこっちのコラボもやってみたいと言う考えが出てきました。まだどっちも未定ですが、一応書くつもりです。

第六章（前書き）

この頃更新が遅れ気味なので二本行きたいと思います。

第六章

先に食事をすませた健二は納戸のような部屋にいる佳主馬に会いに行った。

「久しぶり、佳主馬君」「久しぶり、健二さん」

池沢佳主馬、彼はあの事件後、ＯＭＣの世界大会で見事に優勝し以前よりさらにスポンサーも増え、海外からのスポンサーも受け持っている。

「やっぱり前と比べて忙しくなった？」

「ううん。前とそんなに変わんない。それより健二さんは変わったの？」

「へ？」

「相変わらず、ラブラブなの？」

「え、いや、あの、えっと」

「まあ、その様子じゃキスもまだなんじゃない？」

クールと言うかませたと言うか、佳主馬は中２だが言葉や感じから見ると、とてもじゃないが中２とは思えないような人物である。

「ハ、ハハハ」そんな質問に健二は苦笑いしか出来ない。

「て、本当に！？健二さんてそういうのは本当に弱いよね。あの時も鼻血噴出して倒れちゃったし」

言い返せない。どうしようもなく引きつった笑顔を見せるしかなかった。

「お～い健二。ここ広すぎるよ家の中で迷うなんて、お～い」

「佐久間、ここ、ここ何の用？」

「夏希先輩が呼んでたぞ」なぜかニヤついていたが、健二はすぐに

離れたかったので納戸から出た。

「佐久間さんでいいんだよね？」

「ん？ああ、って君はもしかしてキング・カズマ！？」

驚いている佐久間を気にせず続ける。

「健二さんていつもあああなの？」「そう、毎度あんな感じ」

第七章

◇

「夏希先輩」「あ、健二君こっち～」
なんか、ふらついて見えるけど気のせいかな。

「佳主馬君と何の話してたの？」「ええと、ＯＺで今どうしてるかって話を」
夏希との関係を少しからかわれたなんて言えるわけも無い。
「そうなんだ・・・ねぇ～健二君私のこと好き？」
様子がどうもおかしい顔が赤いし、アグレッシブなのはいつもの事だが今はさらにアグレッシブ・・・と言うよりもウキウキしていた。

「皆にね～健二君とどうしてるのかって聞かれたの。そして、キスもまだだって言ったら、何か哀れみの目で見られたんだよ～」先輩、ち、近いですよ。
どんどん健二に夏希は近づいていく。

「私は今のままで十分良いのに、そんな感じにされたら落ち込むよ～。健二君私のこと好き？」
近過ぎてとうとう息までかかった。健二はその息の匂いで分かった。彼女は酔っ払っていると。
分かってはいたが、少し混乱していた。近すぎていたのだ。
健二と言えども冷静な判断が下せなくなる・・・・可能性がある。
だが、こんな状態といえど夏希は夏希、健二は自分の気持ちを素直に言った。
「大好きです」と。

「ありがとう」と言い健二に思いっきり抱きついた。

「ちょっ、夏希せ！！っぅん」健二は数秒間何が起こったのか全く分からなかった。
夏希本人も素面に戻っていた。今までのことは忘れているようだが、今したことは分かったようだ。
2人は人生初のキスをした。

第八章

2人の空気は気まずいと言うより嬉しそうで恥ずかしそうだった。
2人とも何かしゃべらないと、と思っていたが上手い言葉が見つからずだんまりが続いていた。

「どうにもこうにも2人が何を思っているのかが分からないので、この鉄コンが2人の脳内を見てきました」

◇

健二の脳内では

「おい！一年も経ってんのにこの調子かよ！いい加減にもっと進展しろ！」

ほ～健二にもこんな雄がいるのか。

「いやいやいや、今のは酔っ払っているせいで夏希先輩本人の意思じゃないの」

おう、これが普通の健二

「はぁ？向こうからだったんだぜ。それに話を聞いてただろ！恥をかかせてどうすんだよ」

確かにそうなんだが・・・・

「駄目駄目！お酒のせいでこんな事になったとはいえ先輩は先輩絶対駄目！」

これが健二らしいと言ったら健二らしいような

「五月蝿い！押せばいいんだよ押せば！」

だれかこいつをつまみ出してくれ～

「栄おばあちゃんとの約束があるのにこんな事を今したら絶対駄目！」

「「「・・・・・どぉぉぉしよぉぉぉ！！！」」」

もう滅茶苦茶だな～

それで一方夏希の脳内は？
「いや～とうとうしちゃった。もっと進展したいな～」
さすが体育系の夏希だ。こっちが通常かな？
「駄目駄目！健二君の許可も無くこんな事しちゃったのにこれ以上は絶対駄目！」
お？こっちも夏希らしいと言えば夏希らしい。
「え～でもさぁ健二君嬉しそうだよ」
実際その通りである。
「それに、今ので健二君呆然としてるからもうちょっとちょっかい掛けると思えば」
栄おばあちゃんを連れて来てつまみ出す。
「うれしくても、駄目栄おばあちゃんから誰かを守れる人になりなさいって言われたのに、やっちゃ駄目！」
「「「・・・・いやぁぁぁぁぁ！！！」」」
いやはや、全くお似合いの2人である。それにしても、やっぱり栄の存在が大きいな～
今でもちゃんと残ってるしね。良かった良かった。以上鉄コンからでした。
◇
「あ、あの夏希先輩」先に切り出したのは健二だった。
「な、何？」酔っていたとは言えやっぱり許可なくはまずかったなと思っているようだ。
「さ、先のアレ、う、嬉しかったです」「え？」間の抜けた声をしていた。
そして、すぐに顔を赤くした。
夏希は何とか答えようとかすれる程の声で「ありがとう」と言った。
健二にはちゃんと聞こえていた。
「「ハハハハハ」」

２人は場を紛らわすためか、本当に嬉しいのか笑っていた。

２人の関係は少しづつだが，あの時，よりさらに少しづつ近づいている。

「よっ、ここだったか」

２人は心臓が止まるかと思うほど驚いた。

そこにいたのは・・・侘助だった。

第八章（後書き）

第七章と第八章ではサマーウォーズ―冬―とＳＰＴＥＭＤＥＲ　ＷＡＲＳの文を参考に書かせていただきました。作者ののーとさんとダイちゃんさんにこの場をかりてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

少し夏希と健二のキャラが壊れてしまったかも知れませんが自分的には気に入ってる章です。なので暖かな目で見てやってください。

第三部　新たなる脅威　第九章

突然来た侘助に2人はかなり驚いていた。

「わ、わわ、侘助おじさん！」「お、驚かせないでくださいよ！」
完全に2人は慌てている。
「どうしたんだ？そんなに慌てて、何かしたんか？」
「ち、違います断じてそんな事はしていません！」「そ、そう何にもしてないよ！」
2人の様子を見てシシシと意地悪気に笑った。
「まったく、まだ何も聞いていて無いだろ。それじゃ何かしましたと言ってるようなもんだぞ。ま、何にも無かったことにしといてやるよ」
侘助は自分の家族に挨拶を済ませて仏壇に向かった。

・・・・ばあちゃん、ただいま・・・・

「それで、どうして遅くなったんですか？」
侘助は深刻そうな顔をしていた。
「今からその理由を話す。よく聞いてくれ」
ふぅと深呼吸をして始めた。
「おととい、ＯＺの最下層にある、世界でいちばんやばい、バグが盗まれた」

「・・バグですか？」
2人は話が見えてこなかった。
「それはインターネットの最初のバグで一時、世界を崩壊寸前にまで追いやった」
「え！？」

2人は衝撃を受けた。
「そ、そんなラブマシーン以外にも世界を崩壊にまで追いやったものなんて存在したんですか？」
「そうだ、俺がＯＺでやっていた仕事はそんな、まずいバグやウィルスを管理することだ」
「そんなに危険な場所なのにどうしてセキュリティが破られたんですか？」
健二の暗号がまだ入ってないとは言えＯＺのセキュリティ突破簡単ではない。
「ラブマシーンのせいだ」「・・・え？」
2人は完全に言葉を失っていた。
「あの戦いの時、俺は奴を完全に解体した。だが、残った残骸を拾い集めた奴がいる。そして、その残骸データを使ってセキュリティを突破しちまった」
健二と夏希は青ざめていた。インターネットバグだけでなくラブマシーンの復活までもがありえるからだ。

「そして、一昨日こんなメールが来た」

マタ、センソウスル？

「そ、そのメール！」健二も携帯を取り出して同じメールを見せた。
「け、健二君も？」夏希にも同じメールが来ていた。

「多分バグ盗んだのも奴の残骸データを盗んだのも同じ連中だろ」
「連中って目星が付いているんですか？」
「ああ、そいつらは様々なインターネット犯罪をしている。高度なセキュリティを突破し、ウィルスをばら撒いているネットマフィアだ！」」
健二と夏希はゴクリと唾を飲んだ。

「そのネットマフィアの名は・・・クレイドル」

第十章

「クレイドル・・・・・」
健二の頭の中にはいまだにその単語が残っていた。
◇
「クレイドル！？」
「２人とも名前ぐらいは知ってるだろ？」
２人は静かに頷いた。
「確か全世界で指名手配中の凶悪組織」「私もニュースや新聞で名前くらいは聞いたことが・・」
「恐らくまた、戦争が起こることになるだろな・・・」
侘助はうな垂れながら呟いた。
「明日、全員にこのことを話すつもりだ。お前らはもう寝な」
◇
「健二君、やっぱり寝れない？」
健二と夏希は同じ部屋で寝ていた。
「は、はい・・・」
そう、ただの冗談でしかなかったのだ。それが現実で本当に起こってしまうかもしれないのだから。
「夏希先輩・・・」「何？」
「栄おばあちゃんならまた戦うことを知ったとしても向かっていくでしょうか？」
「・・・必ず行くと思うよ・・・」
今の言葉で、少なからずではあるが健二は決意を固めた。
自分の言った言葉に責任をつけようと。

―翌日の朝―
◇
「お・・・い・・け・・んじ・起きろ」

まだ、眠たい誰だ？
「起きろ！健二！」
起こしてきたのは佐久間だった。
「何？朝早くから？」
「ちょっとこっち来い」
健二が佐久間に連れてこられたのは佳主馬がいる納戸だった。
「すまない健二。昨日の話し俺と佳主馬君聞いてたんだ」
「え？！」
眠たかった意識が一気にさめた。
「い、いつから聞いてたの？」
「最初からだ。すまない。盗み聞きするつもりはなかったんだが」
佐久間と佳主馬は申し訳なさそうな顔をしている。
「だけど、昨日の話しを聞いたおかげでて、そのバグの調査が出来たぞ！」
健二は二人の目もとに目をやった。隈だらけだった。
「ありがとう」健二は呟いた。
「バグの名はバルト。侘助さんが言ったようにインターネット最初のバグだ。それと今一番気になっているのはこの情報だ」
そう言って佐久間はある画像を見せた。
「これがバルト・・・・・？」
佳主馬が説明した。
「うん、僕も最初見て驚いたんだけど、これはバグと言うよりウィルスに近いバグ。インターネットに感染して情報を蓄え移動してまた蓄えての繰り返しをした。最終的にその習慣を利用されて、科学者の手で完全に保管されたけど」
健二はただ、黙ってその画像を見ていた。
ピロン
佳主馬のパソコンにメールが入った。

書かれていたのは非常要請だった。

ＯＭＣの格闘場で正体不明のアバターが暴走中です！救援をお願いします。

三人は顔を見合わせた。そして、ＯＭＣの格闘場に急いだ。

第十一章（前書き）

どうも鉄コンです。
漫画版サマーウォーズ完結お疲れ！健二、佐久間、夏希
「はい、お疲れ様でした、作者の杉基さんもお疲れ様でした」
「と言っても、健二君まだ後日談が残ってるよ」
「そう言う事。後日談の情報はいま一切合切無いけどな」
でも楽しみですよ僕は、三人があの後どうなったかはネット小説で
何個か出てるけど正式のは今回だけだもんな～
3人「そうですよね～（だよな～）」
ま、健二と夏希がラブラブなのは想像出来るけど（笑）
「！！！」2人して赤面になる
「ハハハ、大丈夫かよ健二、先輩」
「と、とにかく始めるよ前書き長くなりすぎだし」
「そ、そうだよね。それじゃどうぞ」
鉄コン佐久間「あ、逃げた」

第十一章

ーｌｏｇ ｉｎー
ＯＭＣ闘技場に入った三人は目を疑った。そこらじゅうに倒れているアバター、ところどころ壊されている風景。

「こ、これは一体？」
周りを見回しても殺風景と倒されたアバターだけだった。その中にはランク入りしているアバターも何人か入っていた。
「２人とも下がって。何かいる」
何かを察したのか、すでにカズマは構えに入っている。

「カズマ君！上だ！」
急降下してきた何かを間一髪で避けた。
「な、何だこれは・・・？」
落下してきたのは赤色の球体。中心が不気味に光っていた。
「これが、インターネット最初のバグ・・・・バルト」
赤い球体は異様な音を立てながらその形を急激に変化させた。

その変化した形は

「ラブマシーン！！？」
三人は声を上げた。な、何でこいつが生きている！色は赤のみと言えども形は完全にラブマシーンそのものだった。

カズマはすぐさま戦闘に入っていった。いつもは、冷静の表情を見せているカズマだが、どう見ても焦りの色が目に見えていた。
「・・・・っ！」
三人は一年前のことが頭に残っていたのだ。特にカズマは忘れられ

るわけも無い。

そう、あの時もそうだった。ＯＭＣの覇者と呼ばれたキング・カズマ全く敵がいなく無敵ともで言われていたのだ。だが、ラブマシーンに負けたのである。

だが、戦闘はそんな不安とは裏腹にカズマの方に流れが向いていた。次々に来るパンチを流石の動きでかわし隙あらば一気にラッシュを入れて行った。
姿形は完全でも中身までは同じではなかった。
だが、三人の顔色から焦りの色は取れない。

「キング、一気に勝負をつけろ！」
「分かってる！」

ラブマシーンの顔面に回転蹴りがもろに決まり、勝負はカズマの勝利かのように見えた。
だが、そんな中ラブマシーンだけは不敵にもシシシと笑っていた。
そして、その瞬間断末魔のような大声を揚げた。

「げぎゃゃゃぁぁゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「な、何だこの声は！？」
ノイズが撒き散らされる。鼓膜が破れそうだ。インターネットもエラーを起こしている。
動けない。ど、どうしたら。

やっと、唸り声が止まったと思った時には佳主馬のアバターはＫ・Ｏになっていた。

第十一章（後書き）

鉄コン「そう言えば第一回目のとき随分扱い酷かったけど今回はちゃんとしてくれたね～」
佐久間「だって、連載意外と長期休載してなかったから」
遠慮がちに　健二「じ、実は僕も少し」
鉄コン「そんな風に思ってたの？！」
夏希「実は、私もちょびっとだけ」
鉄コン「言わないでくれ～これでも頑張ってるんだよ～誤字脱字も編集のときで何とかしてるから言わないでくれ～」
３人「ごめんなさい」
夏希「と、とにかく見てくれてる人もいるから頑張って。ね？」
佐久間「先輩の言うとおり良い物書けば見てくれる人も増えるし」
健二「とにかく頑張ってください」
鉄コン「は、はい頑張ります」

第四部　陣内家　第十二章

「・・・・・・・」
三人は呆然とすることしか出来なかった。
あの、一瞬でカズマを倒してしまったのだから。ラブマシーンは球体へと姿を戻した。
そして、今度は巨大な口のような形になりカズマを食らおうとした。

「まずい・・！」
はっと、我に戻ったサクマは何かをバルトに投げつけた。
バーーーーーーン
大きな音を立て回りが眩くなる閃光弾だ。
サクマとケンジはバルトが一瞬怯んだ隙にすぐさまカズマを連れ逃げた。

――ｌｏｇ　ｏｕｔ――
「・・・・・・」三人はしばらくの間黙ったままだった。そして、納戸から別の人物がやって来た。

「やっぱりお前らだったか今の」侘助だ。どうやら一部始終を見てたらしい。
「無茶をするな。あの時、佳主馬のアバターが食われてたらお仕舞いだったぞ」

「すいません」健二はかすかに呟いた。
「まぁ、何はともあれまずは飯を食ってからだ」三人は頷き食卓へ赴いた。

◇

「何だ、侘助。全員に話があるって？」陣内家は事件を知らないため相変わらず賑やかだった。
「侘助さん。僕から話させてもらっても良いですか？」
「あ、ああお前さんからの方が良い」
「話ってなんだよ健二君」
「実は・・・・・・・・・・

と言うことなんです」
「う、嘘でしょ」「こ、このメールがそんな意味を？」最初にメールを取り出したのは万助だった。
「え？万助兄さんも？」万作が携帯を取り出す。
「お、親父もか？」「克もか？」「どうなってんだ」万作の息子の3兄弟にも来ていた。
全員がざわついていた。
「どうやら僕ら全員に来ていたみたいですね」
「俺達に対しての挑戦状のようだなこりゃ」
健二は首をかしげた。
「どういう意味ですか？」健二の問いに対して佐久間がパソコンの画面を見せた。
「こういう事」画面には例のメールがきた人物を示した表が載っていた。
そして、メールは今ここにいる人物のみだった。
「どうして、私たちだけなの？」
「邪魔だからだろ」侘助は冷静に答えた。
「ラブマシーンは誰にも止められないはずだった。だが、俺達が止めた。目を付けられても当然だな。そして今回のバルトを止められる危険性があるのは俺達と踏んだんだろう。だからこんなメールをおくってきた」
「な、なるほどね」「でも、何で目立った事件が起きてないの？」

万里子の意見ももっともである。
「時間の問題だと思うよ。万里子おばさん。ＴＶ見てみなよ」
pi
「突然ですが速報です。今入ってきた資料によりますと、ＯＺのユーザー登録数が急激に減っているとの事です。ＯＺの関係者は原因を追究するも全く不明のままだそうです。この被害は電力線が動かなくなるなどの被害が起きていて・・・・・・」
「もう、すでに暴走しているんだ」
「それよりも、ＯＺのユーザー登録者数が減っているってどういう事？」
「多分、奴の特性だ。奴はラブマシーンとは違い取り込むのではなく喰らうんだ。恐らく奴がアバターを食えば食う程ＯＺは滅茶苦茶になるだろうな」
「ど、どうしたら良いんですか」健二の質問に侘助は冷たく言い放った。
「どうもできない」
「え？」
健二は凍りついた様になっていた
「やつに、食われたアバターは決して元には戻らない。ラブマシーンのデータもそうだ。佳主馬と戦った時はあんな姿をしていたが一瞬だけだあんな風にコピーできるのは」
「そ、そんな」諦めかけた健二の頭の中に誰かが呼んでいるような声が聞こえた。

・・・あきらめなさんな、あきらめないことが肝心だよ・・・

「え？」健二は周りを見回した。だが周りにいるのは沈んでいた人だけだった。

健二は昨日の決意を思い出していた

そうだ、僕は決めたんだ責任を取ると。自分に出来ることをするって。

「戦う前から、諦めてたら終わりです！今、自分が出来ることをしないと」

第四部　陣内家　第十二章（後書き）

サブタイトルなんですのことなんですが、すいません急遽変更することになりました。活動報告では違うタイトルになっていたんですが（汗）
でも、ストーリには支障は無いのでこれからもよろしくお願いします。

第十三章

「戦う前から諦めてたら終わりです！今自分が出来ることをしないと！」

健二君・・・・・

夏希は一瞬健二と栄が重なって見えた。

「健二君の言うとおりだよ！皆が今出来ることをしなきゃ！」

「夏希、健二君」

侘助は2人の言葉を聞いてから何を思ったのか急にパソコンに向かい始め、かの作業をし始めた。

「侘助さん、何をしているんですか？」

佐久間が侘助に問い詰める。

「奴のワクチンプログラムを作ってるんだ。奴に喰われたアバターやシステムをそっくりそのまま取り返してやる！」

先まで取り返すのは不可能と言った侘助はもうどこにもいなかった。必ず勝つというめをしていた。

それに影響されたのか、佐久間もサポートに入る。

「協力させてもらいます！」

四人が行動を起こしていた時からすでに、陣内家は全員が自分がやれることをするために動いていた。

「今漁船のＧＰＳはどうなってる？・・・やっぱり滅茶苦茶か。だが弱音を吐くんじゃねぇぞ。海の男なら自分の腕でと仲間と一緒に力を合わせて乗り切るんだ」

「緊急要請が途中で途切れたのか。分かった今からその道をナビゲートするちゃんと聞いとけよ」

「なさけねぇ声をだすな！俺達レスキュー隊がそんなんでどうすんだ！気合入れろ！」

「お久しぶりです。ところで交通状況はどうなってるの？・・・なるほどね。信号が役に立ちそうに無いのね。それなら警察の人達と協力して整備を徹底しないと」

――ｌｏｇ　ｉｎ――

バルトはありとあらゆるプログラムを喰っていた。カズマに勝ってからもずっとシステムやアバターを喰い続けていた。

だが、バルトは，ある事に，気付いていなかった。

そう、喰われて止まっていたはずのシステムが少しづつではあるが動いているのだ。

そして、バルトを解き放った張本人はそのことに気付いていた。

「現実世界で何が起きているんだ？」

――ｌｏｇ　ｏｕｔ――

夏希や陣内家が知人や様々な場所に連絡を取りあい奮闘していた所でさ健二、佐久間、佳主馬、侘助はとうとうワクチンプログラムを完成させた。

「これでも食らえ」

ＯＺにいたバルトにワクチンプログラムが見事に的中した。そして、バルトは喰らい続け巨大化したその体から一気に大量のデータが抜けていくことが分かった。

「すごい、侘助さんきいてますよ！」

巨大化した頃の三分の一くらいの大きさになってからあっという間にバルトは逃げるようにどこかへ飛び去ってしまった。

「やった！」

「ふぅ～」

四人は大きな息を吹きながら、その場に寝転がってしまった。

設定

中々バルトやクレイドルの事を書けなったので今回このばで書きたいと思います。

まず、バルトです。インターネットバグという設定はロックマンエグゼ3のラストボスのプロトの設定があんまりにも良かったんで、ちょっともってきました。名前はプロトと英語のバッドを混ぜてバルトになりました。

そして、クレイドルです。小説の中にもあるとおり、バルトは喰らうという事をします。その喰らうという行為から、来た名前です。クレイドルは確か喰らうという意味があったと思うのでそのままいただきました。（もし、間違ってたらすいません（汗））

それと、今回は一年経ってからの設定で書いてはいますが、やっぱり原作が大好きなのでなるべくキャラを壊さないように書いています。

そして、これからの課題ですが今自分の中で考えている課題は陣内家をなるべく多くだすということです。物語を書いているとどうしても出番が少ないキャラと多いキャラがはっきり出てしまうので、そこを上手く書くことが僕の今後の課題だとおもっています。

それと、最後にもし皆さんからもっとこうしたほうが良いよという意見があればどんどん感想に書いてくださいお願いします。

１００００ｈｉｔ記念

はい、鉄コンです。まず、活動報告にも書きましたが本当に１００００ｈｉｔありがとうございます。

健二、夏希、佐久間「ありがとうございます」

佳主馬「ありがとう」

侘助「ありがとな」

と言うわけで今回１００００ｈｉｔ記念と題しまして、座談会をやります。

サマーウォーズ２主要キャラ５人に来てもらっています。よろしく！

五人「よろしく！」

佳主馬「でも、１００００ｈｉｔも行くとおもってなかったよ」

ヒドイ佳主馬君！！どこで覚えたのそんな言葉！？

侘助「言われても仕方ないだろ。どこのどいつだ？書き上げた章をすぐに編集して字直したの」

ヒドイや、ヒドイや（泣）

夏希「ま、まぁそこはいつものノリで軽く流しなよ」

うんそうする

五人（立ち直り早いな～）

そう言えばＫＫＫ団てあの後どうなったん？

健二「あ、そう言えばひどいですよ～僕が追い掛け回されてたのに火に油を注ぐようなことを言って」

で、どうなったん？

健二「・・・・・・・地獄でした」

健二以外（察したほうがいいなこりゃ）

佐久間「でも結局２人の関係が未だにな感じだからＫＫＯ団と言うのもできたらしいけど」

なんじゃそりゃ？

佐久間「小磯・健二を。応援するための・団だって」

お～良かったじゃん

健二「よくないですよ、こんな事先輩に知れたら・・・・」

夏希「さっきから何の話？ついていけないよ～」

健二「な、何でもないです夏希先輩！」

何でＫＫＯ団が出来たのかわかった気がするよ・・・

佐久間「まぁ、ＫＫＫ団も未だに残ってるけど」

ありゃ～まだ残ってんの。して、佐久間

佐久間「ん？」

お前はまだその団に？

「・・・」

「・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・・」

健二「さーーーーくまーーーーーーーー！！」

＊しばらくお待ちください＊

佐久間「ふ、ふいふぁふぇん（す、すいません）」

夏希「健二君・・・怖い」

ま、それはそうと。２人の関係はどうなん？

夏希、健二「！！！」

健二、夏希以外「キスもできないようじゃねぇ～」

夏希「ううん、したよ」

健二「ななな、夏希先輩！！？」

あ、言っちゃた。しかも満面の笑みって・・・・天然すぎる。

陣内家「なにーーーーーー！！？」

健二「わわわ、皆さん！？」

いつのまに・・・・

直美、理香「いや～そういう事は言ってくれないと」

万作「いや～おめでとう。彼氏殿、いや婿殿」

翔太「俺は絶対身と認め・・」

万助「お前はだまっとれ！」

相変わらず賑やかなこって。

そう言えばあの時何で酔っ払ってたん？

夏希「分かんない」

そんなにきっぱりと・・・

陣内家は見てなかったん？

万里子「確かジュースか何かと間違えてたような」

理香「あ、そうそうピーチジュースを飲むつもりが桃のマークが入ったお酒を飲んでた」

お、おいおい・・・
ま、いいや～

全員「軽っ！」

そう言えば、佳主馬はどうなんよ？
世界大会の時辻本とかに当たったって聞いたけど？
（辻本とは漫画サマーウォーズ　キング・カズＶＳクイーン・オズに出てくるキャラクターです。）

佳主馬「ああ、それ？確かに当たったよ。でも、辻本以外にも双葉や渡、それと力也もいた。皆、びっくりする位実力上がってたけど。力也なんか特に」

それでも、優勝するなんてさすがだな～

健二、佐久間「僕たちもその戦い見てたけど、凄かったよ」

佳主馬「健二さん・・・佐久間さん・・・」

良かったな～
で、侘助はコアエンジニアになる時に苦労かなんかしなかったの？

侘助「苦労ねぇ～、特にしなかったけど」

さ、さすが東大で旧家の出身でアメリカ留学から帰ってきた男（汗）
・・・・て、アレ？　何で健二胸押さえての？

健二「何か、心臓にグサリと刺さった感じが」

愉快犯扱いされたときのまだ残ってんのか。
でも、もてる男にはちょっと傷つけるぐらいがいいや。ザマァ（笑）

夏希「鉄コンさんちょっと来てねぇ～」

え、なになに？ちょちょちょちょ何処へ？
・・・ギャァーーーーーー

＊しばらくお待ちドカッくだバキッくだギャーーさい＊

ふぉ、ふぉんふぁふぁふぉふぇひはいひはふ
（そ、それじゃまとめに入ります）

夏希「健二君を傷つけたらこうだからね（ニッコリ）」

健二「先輩・・・怖いです」

万助、万作「家の女怒らせるとこうなるから気をつけろ」

言うの遅いよ。
ま、それはそうとして。
サマーウォーズ2もいよいよ後半に入りました。
頑張って書くので、感想やサポートをどんどん送ってくださいお願いします。

一同「よろしくお願いします」

第十四章（前書き）

更新がやや遅れ気味ですいません。なので、そのお詫びに今日は二話連載します。

佐久間「とうとう、遅れてきたか」

健二「大丈夫なんですか？」

・・・・・・大丈夫です！

（今の間は何だ、今の間は）

第十四章

ーーー夕暮れーー

「皆、お疲れ様」

万里子が皆に言って「お疲れ様！」と号令をしご飯を食べ始めた。

「いや～あの時の健二君には驚いたよ～。ばあさんが戻ってきたのかと思ったもんだ」

万助が言い出すと一斉に「私も、俺もだと」言い出した。

「いや、その、栄おばあちゃんだったらこう言っただろうなと思って」

「うん、あの時の健二君本当にカッコよかったよ」

夏希は満面の笑みで答える。健二はその笑顔を見ると相変わらず顔を赤くしてしまう。

「シシシ、彼氏殿照れてるのか？」

「本当に相変わらずだな～健二」

侘助と佐久間がからかうと大笑いして2人を見る。

「ＯＺニュース速報です」

テレビの音に皆が一斉に反応する。

「システムの６０％以上が障害を抱えている状態です。さらにＯＺのユーザー登録者数も一千万も減っています。ＯＺの関係者は使用を控えるように警告を出しています。・・・・」

最初に切り出したのは健二だった。

「侘助さん・・・」

「ああ、今日は奴を一時的に撃退したに過ぎない」

「まだ終わってないってことですね」

「何とかならないの？侘助おじさん」

夏希が質問するときには食卓を離れてパソコンを持って連絡を取っていた。

「今、世界中のコアエンジニア、腕利きのワクチンプログラマーと協力して奴に対抗できるワクチンを作ってる。そろそろ各々の所から連絡が来てもいい頃だが」

パソコンで作業を続けながら答えた。

ｐｉｐｉｐｉｐｉ

「お、来た・・・・か？」

そこには、連絡が来るはずのプログラマーではなく全く知らない番号が書かれていた。

侘助は恐る恐るウィンドを開ける。

「だ、誰だ」

ウィンドのＮｏ　ｉａｍｇｅと書いてある画面を見ながら言う。

「いや～驚きましたよ一時的とはいえ、あのバルトを止めちゃうなんて」

声は少し若かった。少しおちゃらけている様にも聞こえた。

「誰だと聞いているんだ！」

今度は強い口調で言った。

「案外、鈍いですね～侘助さん。それに、近くに健二さんや夏希さんもいるんでしょう。

自己紹介しましょう。僕がクレイドルです」

先まで楽しげだった食事の雰囲気はあっという間に消えてしまった。

第十五章

「ク、クレイドル・・・だと？」

そう、たった今話しているのは紛れも無く今回の事件の張本人なのである。

健二が話しかける。

「あ、あなたは一体何でこんなことをするんですか！？」

クレイドルは楽しげに続ける。

「お、その声は健二さんですね？何でこんなことをするかって？楽しいからですよ。僕にとっちゃこれはゲームなんですから」

場は一瞬静まり返った。

「ふ、ふ「ふざけるな」ざける・・・な」

佳主馬が言う前に侘助が叫んだ。

「今日どれだけの人が被害にあったと思ってるんだ！！」

夏希は驚いていた。何度か侘助のことを見てきてはいるが、怒った事は無かったのだ。

それほど、侘助の声は怒りで震えていたのだ。同じ技術者として、そして一年前自分がやった過ちがまた同じように繰り返されることを侘助は怒っていたのだ。

だが、クレイドルはあざ笑うかのように侘助に答えた。

「ハハハ、何を怒っているんですか？以前あなたがした事と何が違うんです？」

言い返せなかった。クレイドルの言うとおり自分のやった事とかわっていないからだ。

侘助はやり場の無い怒りを何処かにぶつけてしまいたかった。

「違います！」

その声に侘助はすぐに反応した。

「侘助さんは確かに間違った事をしました。でもそれは、陣内家を昔のように戻そうとするためにしたことです。悪意があってやった事じゃない！でも、あなたは違う！バルトがどれだけ危険なものかを知っていてこんな事をした。そした、ただ被害を出して楽しんでるようにしか見えません！」

「健二君・・・・・」

「へ～健二さんがそこまで言うとは思いませんでしたよ。ま、僕にとっちゃそんな事はどうでもいいんですよ。本題はこっちです。」

piと言う音が出てメールが全員に一斉に送られてきた。

「キング・カズマへの挑戦状？」

「そうです。これに勝ったら僕は一切合切バルトにかかわるのはや

めましょう。ただし、もしあなた達が負けたら・・・」

「負けたらなんなんですか」

「一切この件には関わらないでください。それじゃ」

pi

第十六章

「・・・・・・」沈黙はしばらく続いた。

「とりあえず、その挑戦状を見ましょう」

全員が自分の携帯を見る。

内容にはこう書かれていた。

キング・カズマ　挑戦状

明日の正午ＯＺ闘技場にて待つ

ルールはシンプル。相手を倒せば勝ち。だが１対１でなくてもよい

「これだけみたいですね・・・」

「この１対１じゃないってのが気になるな」

佐久間の言うとおり相手はどうやら１人。人間相手のＯＭＣの戦いだったら佳主馬が負けるはずがない。

それなのに、１対１でなくてもよい。この条件はどう考えてもクレイドルが不利になる一方なはずである。だが

「奴の口ぶり、性格からまともに戦いをするとはおもえないがな」

皆が頷く。健二の言ったとおり被害を起こして楽しむような奴にまともに相手をするとはかんがえづらいのである。

「そういえば、あんたワクチンプログラムがどううだのとか言って

なかった？」
直美が質問すると同時にかかってきた
ｐｉｐｉｐｉｐｉ
「今度こそ、来たな。・・・もしもし、そうか出来たか」
話している相手はどうやら以前留学していたときの大学の教授、コアエンジニアの同僚などである。
「太助おじさん」
「分かってる。スーパーコンピューターでしょまかせといて」
「理一さん」
「大丈夫こっちも明日までには何とかできる」
「師匠」
「大丈夫だ！佳主馬まかせておけ！」
武器の用意はどうやら明日までに全てそろいそうだ。
「侘助おじさん・・・私たちも何か出来ないの？」
以前は栄のことで一杯一杯だったが、今回は別だ。指をくわえてみてることはこの家族にはできないのである。人の役に立てと栄に言われ続けてきたこの家族だからだ。
特に夏希は栄のこともあるが健二の事もある。健二のためなら出来

ることは何でもしたいそんな気持ちが強いのである。

「ああ、あるぞ。皆携帯を出してくれ・・・」

「佳主馬君」

「大丈夫これでもＯＭＣ世界チャンピオンだから」

決戦は明日である。

第五部　逆転の秘策　第十七章（前書き）

更新が十日も空いてしまってすいません。インターネットにつなげないことが多くなって中々書くことが出来ませんでした。もしかしたら不定期になってしまうかもしれないかもしれません。そのときは活動報告に書きます。本当にすいません。

第五部　逆転の秘策　第十七章

一朝　４：００一

健二はもうすでに起きていた。いや全員すでに起きていたと言ったほうがいいだろう。

健二は広間のほうに行き、作業を続けている侘助と佐久間に会った。

「佐久間、いつの間に起きてたの？」

「まともに寝れなくてね。やることないから作業を手伝わせてもらってるんだ」

「大丈夫ですか？侘助さんまともに寝てないんじゃ・・・」

昨日遅くまでカチカチと音がなっていたのである。

「シシシ、安心しなよ。彼氏殿、こんぐらい奴を作った頃のしんどさと比べるとまだましな方さ。こっちは大丈夫だから、他の皆のほうに挨拶をしてやってくれ」

健二はとりあえず挨拶をしに行って見るとすでに料理をしている、万里子、聖美の姿があった。

「お、おはようございます」

「おはよう、健二君」相変わらず聖美は愛想がいい。

「健二君・・・大丈夫？あまり寝てないんじゃないの？」

健二自身も気付いていないようだが健二の目の下にも隈が溜まっていた。

「大丈夫ですよ。そういえば夏希先輩は？」

「一番、最初に起きて準備してたわよ」

健二は万里子に言われた場所に行った。

「夏希先輩、おはようございます」

「ん？　あ、健二君おはよう」

（あ！）

健二は驚いていた。目の隈が一番ひどかったのだ。

「夏希先輩、寝たほうがいいですよ」

「大丈夫」と言いながら彼女は少しふらついていた。

先輩は皆のために一番頑張っていたんだ・・・・

健二はそう思いながら夏希を優しく抱いた。

「健二・・・・君？」

「先輩は皆のために頑張っていますよ。でも無茶したら皆に心配を掛けます。だから、今はゆっくり休んでください」

「・・・・・・うん。ありがとう健二君」

そう言うと夏希はすぐに健二の肩で寝てしまった近くにいた、万作から話を聞くとどうやらあのクレイドルの対話後気分が沈んでいた皆を励ましてくれていたそうだ。

第十八章

健二が夏希を寝床に連れて行き二時間後

ブゥゥゥゥ

車のエンジン音に気付き表に出た。

「あ、太助さ・・・ん?!」

その場にいた健二と佐久間は言葉を数秒言葉を失ってしまっていた。前に持ってきた２００テラバイドのスーパーコンピュータも凄かったが、今回はすごいとかそんなレベルではないのである。ハッと我に返りとりあえず健二は太助に目の前にあるものが何か聞く。

「こ、これ何ですか?」

「あ～、これ１ペタバイドのスパコン。あの事件後、結構ハイスペックな奴の頼まれるようになってねこれは、サイバー系の大学に納品予定の持ってきたんだ」

「・・・・・・」

「お待たせ～」

今度は理一が来た。

「あ、理一さん。またアンテナモジュール持ってきたんですか？それに、ミリ波回線も」

「まあね。でもアンテナモジュールの方は前回と変わらないけど、ミリ波回線は軍事用のでこっちでは最高の１テラバイドの持ってきたんだ」

「・・・・・・・」

呆気にとられている２人にさらに拍車を掛けるように万助がやってきた。

「ま、万助おじさん。また漁船を持ってきたんですか！？」

「おう！あの後国から３００ｋｗのエンジンを１ｔｗに変えてもらったんでな」

「・・・・・・・・・・・」

「・・・・・なぁ、健二」

「・・・何？」

ポケーっとした表情で佐久間が質問する。

「夏希先輩んちって本当になんなの？」

「・・・・・・僕も分かんない。」

「おいおい・・・・」

２人の会話を聞いていたのか後ろから唐突に佳主馬が答える。

「だから、普通の家だよ」

普通に平然に言い切ってしまった。

どうやら、戦闘準備は超万端のようだ。

番外編　特別留年の理由（前書き）

鉄コン「ただいまーー！」
３人「テストお疲れ様～」
鉄コン「な、何だその目。まるで勉強してなかっただろ的な目は！」
夏希「だって、そんなに勉強してないんじゃ・・・」
佐久間「一夜漬けだけだろ」
健二「もうっちょとやったほうが良かったんじゃ」
鉄コン「フフフフフ、この頃作者を舐めきってるね君たち」
３人「な、何その不気味な笑い方は？」
鉄コン「作者の名の下に夏希が何で特別留年したかこの話でばらす！」
夏希「や、やめて～～」
鉄コン「フフフフ、後悔しても遅いのだ！それでは皆さんどうぞ！」
Ｐ．Ｓ
今回の話は前半が漫画版の後日談がベースなのでかなり酷似しているところが多いです。本当にすいません。それと、この章は本編の事件が起きる前の話前回の番外編と思っていただければ大丈夫です。

番外編　特別留年の理由

―ラブマシーンの事件から数ヵ月後―

夏休みのときと同じように2人はＯＺのバイトをしていた。

「で？どうなんよ、調子は？」

「普通だけど」

「付き合ってんだろ」

「ちゃんとやってるよ。バイト」

「違うわ！夏希先輩との付き合いは上手く行ってんのかって聞いてんだ！」

健二は相変わらずである・・・

「べ、別に付き合ってるわけじゃ・・・」

「へ？」

思わず間抜けな声が出てしまっている。

「告白したし、キスされたんだろ、しかも全国放送で夏希先輩、ああゆう風に言ったし」

「告白はどさくさだし、キスは頬だし」

小さな声で続ける

「そもそもちゃんと付き合ってくださいって申し込んだわけじゃないし、先輩は受験でいそがしいし、そもそも先輩が僕のことを・・・」

ぶつぶつと言い訳を重ねている。そんな様子を見て佐久間は少し呆れ気味だった。

（そう思ってるのは俺を含めてこの学校にはいないだろうな。あえて言わんけど）

「こんにちはー！」

夏希は大きな音を立てて扉を開けて入ってきた。その音に情けないほどビクッとしている健二。

「せ・・・先輩それ心臓に悪いですよ～」

「お疲れです」

夏希は志望の大学に向けて猛勉強中である。剣道部も引退し塾に行くまでの時間をここよく潰しているのでる。健二にっとてはあの事件後仲が良くなれて嬉しいが意識せずにはいられないのである。

「本当に頑張ってますね、先輩何処に生きたいんですか？」

「東大」

沈黙が一分ほど流れる。

「えええええ！？何でまた？」

確かに夏希の成績は良いほうなのだが、東大となると厳しいことこの上ないのである。

「む～、そりゃ無茶だって分かってるけど負け戦だってやるの私は」

口を尖がらせてちょっとぶうたれる。

「でも、同じ所に行きたいから」

なぜか、恥ずかしそうに言う。

「ああ！」

佐久間が先にきづいたようだ。

「・・・あっ」

健二は頭の中に侘助を思い出した。

「……ですよね～」

ちょっと複雑な表情をしながら答える。

「健二君東大の理学部志望だよね？私は文学部なんだけど」

「あ、はい。いちお・・・う」

健二は思わず「ああっ！」と声を上げてしまった。2人の顔が一気に赤くなっていった。

「遅ぇよ・・・」

呆れた目で健二を見る佐久間であった。

「あ、えっと、そろそろ時間だから行くね」

「あ、はい」

時間にはまだまだ全然早いのに焦るように物理部の部屋を出て行ってしまった。

◇

「なぁ、健二」

「な、何」

「これで、分かっただろ？付き合ってないって思ってるのはお前ぐらいだよ」

「う、うん」

「この際だし、塾開いてる日に受験勉強手伝ったたら？」

「そうする」

帰り道終始健二は佐久間に言われっぱなしで顔を赤くしていた。

◇

ー翌日ー

「こんにちは」

「こんにちは！健二君。入って入って」

今日は学校も塾も休みである。そこで健二は夏希に数学を教えることになった。いや、教えてもらうように頼まれたのである。あの後、すぐに夏希にメールを送ろうとしたのだが、先にメールが来て数学を教えてもらうように頼まれたのである。

「それで、何処までが分からないんですか？」

「二学期は苦手なのがたくさん出てきてね、ちょっと分からないのが多いんだけど」

「・・・・あ、これぐらいだったら大丈夫だと思います」

「本当！？ありがとう！」

夏希はおもむろに手を健二の手を握る。相変わらずなのか健二はあっという間に赤くなってしまう。

ー三時間後ー

「どうですか？ちゃんと自分では上手く出来たつもりなんですけど・・・」

「うん！とっっっても分かりやすいよ！数学取るのやめて健二君に毎日教えてもらったほうがありがたいな～」

「ほ、本当ですか？ありがとうございます」

「それじゃ、休憩入れよう。お茶取って来るね」

「はい。ありがとうございます」

中々良い感じになってきている二人である。
お茶やお菓子を夏希が持ってきた。その片手には花札があった。

「ねぇ、やろう健二君。これ終わったらまたやるから」

「はい、あの後僕も強くなりましたよ。甘く見てたら痛い目見ますよ」

この後、花札を楽しんでまた勉強に取り掛かった。健二には教師の才能もあるのか否か苦手だった数学も夏希はあっという間に解けるようになっていた。そして、日が暮れて・・・

「今日は、ありがとう」

「いえ、お疲れ様でした」

「健二君、私、絶対合格するから」

健二は微笑んで「はい！」と元気に返した。

それから、また数ヵ月後していよいよ合格発表日になった。

ー3月ー

健二は夏希からのメールを待っていた。

「健二ちょっとは落ち着けよ。気持ちは分かるけど」

「うん」

生返事しかできなかった。どうしてもそわそわしてしまう。

pipipi

2人はすぐにその音に反応してしまった。メールの内容を急いで見た。

ありがとう、健二君

「やったーーーーーー！！」

その声が学校全体に響いたことは言うまでも無い。そして、数時間後いつもより元気よく「ただいまー！」という声が響いた。

「先輩合格おめでとうございます！！」

2人の祝福の声も響いた。

「ありがとう。2人がいなかったら、合格できて無かったよ」

少し目を潤ませながら言っていた。

「（健二、俺はちょっとお邪魔みたいなんで、席はずすは）」

「（ご、ごめん。佐久間）」

夏希に気付かれないようにしゃべり佐久間は物理部の部屋を後にした。

「健二君、本当に教えてくれてありがとう」

健二は思いきり抱きつかれていた。顔を赤くしながらも何とか答えた。

「い、いえ、そんな。先輩も頑張ってたじゃないですか」

「うん、ありがとう」

「それで、先輩いつから入学式なんですか？」

「来年の四月」

「へ？」

思わず間抜けな声がでる。

「何で来年なんですか？」

「そ、その特別に留年を学校が認めてくれて、家の学校東大でたの初めてらしいから」

「でもなんで？」

「そ、その、ええと」

かなり困惑している。口を濁していたが思い切って言った。

「健二君と一緒に卒業したいから！」

そう言った瞬間2人はまた顔を赤くした。

健二と夏希、結局2人は自分で気付いていないだけで知らず知らずのうちにお互いを思いやっていたのかもしれない。

そして、今

「おはようございます、夏希先輩」

「も～、先輩じゃなうていいよ～クラスメイトなんだから」

2人の仲は好調である。

番外編　特別留年の理由（後書き）

鉄コン「な、何か本編よりものすごく長くなってる（汗）」
夏希「は、恥ずかしいよ～」
健二「これ、僕も罰ゲームみたいになってるじゃないですか！」
鉄コン「それじゃ今日の更新はこれにて、明日こそ本編に移りたいと思います」
２人「無視！？」

第十九章

「皆さんそろそろ時間です！」

「準備完了」

「こっちもいける」

「いつでもいいわよ」

「・・・しまっていこう」

◇

朝食を食べ終わった後、各自でそれぞれで時を過ごしていた。万里子や夏希は仏壇の前で報告を健二、佐久間、侘助らは機会とプログラムの調整。時間が来るまで各々が自分が出来ることをしていた。

◇

ワールドクロックの数字が１２：００：００へ近づいていく。時間まで残り十秒。

ピ　ピ　ピ　ピ　ピ

ポーーーン

世界中のニュースウィンドが一斉に開かれた。

―ｌｏｇ　ｉｎ―

「来たよ・・・」

片腕が大砲のようになっている怪獣に似たアバターがこっちへ向かってくる。

「こんにちは」

相変わらず、楽しげな声は変わっていない。

ＯＭＣのバトルフィールドが開かれてもいないのにアナウンスが流れる。

「この、戦闘では特別ルールが適用されます。一対一ではなく何人でも参加が可能です。アンノウンさんのメンバーを設定してください」

クレイドルは不敵な笑みを見せる。

「メンバーは私と小型バルト」

怪獣アバターも背後から一斉に赤の球体がわいて出る。

「カズマさんのメンバーを設定してください」

「メンバーは「僕（俺）達全員」」

一斉に全員のアバターが出る。

「それでは戦闘開始です」

合図と共にクレイドルが派手な音と共に大砲を撃つ。

ズッドーーーーーーーーーン！

被弾した場所から一気にウイルスが侵食する。

「！？」

「とっておきのバグ弾ですよ。当たったらおしまいだと思ったほうがいいですよ」

「なるほど」

あくまで冷静なカズマ

「カズマ、わしらはあの赤い球を何とかする。お前は奴のほうを」

「師匠・・・。分かった」

カズマは構えを見せクレイドルへと向かう。

「勝負だ！」

第十九章（後書き）

はい、鉄コンです。この頃筆が何故か進みません。ちゃんとストーリを書いちゃいるんですが・・・。でも更新を遅らせる気は無いのそっちのほうは大丈夫です。

第二十章

健二・夏希ｓｉｄｅ

「昨日おじさんの言った通りになった！」

小型のバルトを見て夏希は思っていた。

◇

ー昨日の夜ー

「私達にできることはない？」

「ああ、ある。ちょっと携帯貸してくれ」

差し出した携帯にＵＳＢのケーブルをつけてまた手をキーボードの上に乗せて手を流していく。

「世界中のエンジニア達と作ったワクチンプログラムの一つだ」

「・・・銃？」

そのワクチンの見た目はどう見ても銃だった。

「佳主馬に挑戦してくるって事でＯＭＣ用に改良したんだ。まぁそういう形になるだろうな。それぞれのアバターに会うようにつくっておく。それともう一つそれでウイルスを打ったらこの、バルト専用の消去箱に入れてくれ。名前の通り完全にしょうきょできる」

「す、すごい。ありがとう、侘助おじさん」

◇

「行きますよ！夏希先輩」

「うん！」

何千何百の小型ウイルスと十何体とのアバターの戦いが始まった。

「キエエェェェ！」

勢いよく飛び出したのはマンスケだ。日本の刀を振り回し滅多切りにしていく。

ゲーム小僧三人組も日頃やっているせいかどんどん数を減らしていく。

「克彦、邦彦行くぞ！」

三兄弟の長男が叫ぶ。そしてそれにこたえて「おう！」と答える。

ヨリヒコの合図と、共に巨大な箱が現れそのふたをカツヒコが防火用の鉞でそのふたをこじ開ける。箱の中から現れたのは水である。その水にホースを突っ込みヨリヒコがホースをクニヒコの背中に差し込んだ。

「喰らえ、侘助特製のワクチン水だ！」

陣内家の奮闘でどんどん動きを止めていくバルト。そして、一気に

消去箱に入れていく。
ゲームがなれない女達も少しずつではあるが数を減らしていっている。
圧倒的に有利な陣内家であるのに、何故かクレイドルは不敵な笑みが消えていない。

カズマｓｉｄｅ

「お前、何を笑っているんだ？数は減っていくばかりだぞ」

「ハハハ、ちょっとは面白いゲームになっている。そう思っただけですよ」

「？」

カズマには言葉の意味が理解できなかった。

「それじゃあこっちもそろそろ始めますか？」

「・・・来い」

彼らは気付いていない。本当の危機が迫っていることに・・・

第二十一章

ズガン！ズガン！ズガン！

クレイドルが大砲を撃ち続けるのに対してカズマはそれを避けて様子を見ている状態である。

「どうも、これだと無意味ですね・・・」

痺れを切らしたのかクレイドルの大砲だった腕が刀に変わってカズマに切りかかる。だが、流石というべきか接近戦になろうとも巧みにさけつづける。ＯＭＣを勝ち抜いてきたカズマには全く当たらない。

「今度は、こっちから行くよ・・・」

ヒュン

「！！？」

一瞬だった。何かがクレイドルの巨大な図体を吹き飛ばしたのである。２人とも何が起きたのかは全く分からない状況だった。

「・・・・・・」

カズマは自分の拳を見て何か考えている。そして、数秒後またもやクレイドルが吹き飛びようやく自分がクレイドルを吹き飛ばしたことが分かった。

「す、すごいよ！」

太助達が持ってきた機材と、カズマの実力によってたった数分でクレイドルは圧倒されていた。

「な、何だ！？何が起こっているんだ！？」

クレイドルは気付いていなかった。いや気付けるはずが無かった。操作しているのはカズマ本人のみ動きが分かっているのはカズマだけなのだから。

混乱しているのか、クレイドルはやけくそ気味に刀の腕を振り回すがもはや何をしようともはや何の意味も持たない。カズマを止められるものは誰もいない。

「約束だ！バルトにはもう関わるのをやめてもらうぞ！」

ＯＭＣのチャンピオンのサマーソルトキックが決まり、今回の事件の首謀者は地に伏した。

第二十一章（後書き）

こんにちは、鉄コンです。
まず、今回どうしても文が短くなってしまって。すいません。
どうにもこうにも、戦闘シーンは短くなってしまいがちで上手く書けません。本当にこうゆうのがかける人が羨ましいです。
今回のような戦闘シーンが得意な方はぜひアドバイスをください。
本当に本当にお願いします。

第六部　侵食されるＯＺ　第二十二章

健二・夏希ｓｉｄｅ

「後、もう少し！」

最初に何千対といたバルトも、もう数えられるほどの数に激減していた。

「奴が、最後の一体だ！」

ワビスケが叫んだ瞬間にケンジが反応しその最後の一体に狙いを定め引き金を引く。見事に命中しすぐさま隣にいたマンスケが消去箱に入れる。

そして、クレイドルと一対一の勝負をしていた、カズマもサマーソルトキックを決めクレイドルが地に伏せていた。

ケンジはカズマの方へ向かう。

「カズマ君！大丈夫？」

「健二さん。こっちは大丈夫だよ。今終わったところ」

ホッと安心の息を出す健二。だが、それとは逆に何故かカズマは何かひっかかるような、納得がいかないような顔をしていた。

「お前、まだ何で時間を稼ぐような戦い方をしていた？」

カズマが何か含みのあるような言い方でクレイドルに聞いた。

「最初に対話して陣内家の方々は案外鈍いと思ってたんですけどね〜」

ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ　ＤＡＮＧＥＲ

狂ったようにＤＡＮＧＥＲの文字が浮かび緊急のサイレンが鳴り、アナウンスが放送される。

「緊急事態、管理棟に何かが侵入、繰り返す管理棟に……」

「どういう事だ、一体何をしたんだ！！」

侘助が問い詰める。緊急事態にも関わらず楽しげな口調でしゃべり続ける。

「最初に小型バルトを出した時一体だけ特別に細工しましてね。ステルス機能を持たせたんですよ。特別製のね。だから、さっき最後の一体と間違えた」

「ッ……！！」

「のんきにしてていいんですか？奴はラヴマシーンと違って暴走することしか知りませんよ」

健二はすぐにその言葉の意味を理解した。

―ｌｏｇ　ｏｕｔ―

「理一さん、世界中の核施設の状況はどうなってますか！？」
理一もクレイドルの言葉が分かっていたのか、健二に言われる間もなく調べていた。
「まずい、今核施設のセキュリティイにバルトが入ってる！制御不能になる一歩手前まで来ている！」
「何！！」
全員が理一の言葉に食い入る様に一斉に叫んだ。
「ふざけんな！！この野郎！！何のつもりだ俺達は勝っただろうが！！」
翔太は拳を作って震えていた。
「ええ、だから約束どおり僕自身はもうバルトを動かしてはいないじゃないですか」
「この野郎」
「翔太兄ぃ落ち着いて！とにかく管理棟に行きましょう。理一さん。内部の映像出せますか？」
「ああ、何とかな。バルトに喰われてなければうつせるが。お、おいこれは」
理一の様子に皆が不安を煽られた。そして、全員がそのモニターを見る。

そこにあった映像は……

第二十三章

「な、何だこれは……？」

カメラが捕らえていた映像は地獄の様な光景を写していた。

「いつの間に、こんな……」

その場にいた全員が言葉を失っていた。いや、奪われていたと言った方が正確である。メインサーバーの以前の面影が全く無い。これがＯＺか？と目を疑うほどなのだから。

バルトが乗っ取ったメインサーバーはバルトの色と同じ赤黒い風景だけが残りそれ以外は何一つ残っていない。気味が悪いほどに。

「ボーっとしてていいんですか？呑気ですね～。時間が無いんでしょう」

その言葉で我に返り状況を確認するがすでに手遅れであった。最後のセキュリティを踏み越えて他のバルトが核施設を乗っ取ていた。何か策を立てようと佐久間が提案する。

「健二、お前がまた、あの時みたいにパスワード解いて奪い「ダメだ！！」返せ……ば」

言い切る前に侘助が遮る。

「あの光景を見ただろう！？あの状況でパスワードを解いてゲートを開いたら増殖したバルトにシステムを喰われてまた取り返すの繰り返しだ、そもそも消去箱の容量がそんな大量には無い！」

「それじゃあ、あの時ラヴマシーンにした様に閉じ込めてそして、消去は？」

太助が首を横に振る。

「それもだめだ。いくらラヴマシーンに通じたといっても奴はウイルスじゃない。ウイルス相手にアレをやっても食い潰されるだけだ。それに、結局あの時も最終的に破られてしまった」

周りは全て沈んでいた。やれる事をやったら勝てると思っていた。だが甘くは無かった。そこにさらに残酷な数字が出る。

「今、世界各国の核施設のセキュリティに侵入したそうだメインサーバーを通してバルトが暴れまわっているらしい。施設側のエンジニア達も何とかしているものの、持って時間はせいぜい数時間。その程度だそうだ」

まさに、状況は最悪。その状況をクレイドルが嘲笑う。怒りで拳を震わせているものもいるだが、余計にクレイドルを機嫌よくさせるだけであった。もう何もできないと思っている。

2人を除いては。

そう、小磯健二と篠原夏希を除いては。

あの時の様に諦めていない目がそこにはあった。夏希は健二のそんな所に惹かれて行ったのだ。そして彼女も健二と同じ目をしている。絶対に諦めない逃げ出さないと言う強い信念を持った目を。

今の彼らの目は……陣内　栄　そのものだった。

第二十四章

健二の頭の中にはどうやったらメインサーバーを取り戻せるか、どうしたらバルトを倒せるかそれしか考えていなかった。

やつを倒すにはどうしたらいい？以前のラヴマシーンの時は大量にあったアカウントを世界の人達のアカウントをつかって取り戻せることができた。だけど、今回の敵は壊すことだけが目的だ。絶対に勝負になんか乗ってこない。なら、どうする？そもそもどうやってあんなに増殖したバルトを消去する？消去箱の容量も足りていない。

「健二君……」

不意に夏希が声をかける。

「その、消去箱だっけ？それって、あのウイルスみたいに増やすことって出来ないのかな？」

増やす？増殖……コピー……ＯＺ……世界の人達……

夏希が言った言葉で健二の頭がバルトを倒す方法を一気に閃いた。

「そ、それです！先輩！」

「え？え？それって何？」

急に大きな声を掛けられて、驚いている。二人以外は唖然としている。

「ふ、２人とも……」

ようやく、口が開けられた万里子がポツリと呟く。

「諦めるつもりはありませんよ。（諦めるつもりはないよ。）」

２人の真っ直ぐな瞳はじっと陣内家を見ていた。そして、諦めかけていた陣内家に火をつけた。

「そうか、そうだったな」

「まったく、情けない所を見せちまったなおい！皆！気合いれるぞ！」

万助の声で陣内家は一気に活気づいた。

「侘助さん！」

健二に声をかけられる前にすでにキーボードに打ち込んでいた。

「分かってる。消去箱のコピーだな？だが、一つだけ問題がある」

「問題？」

「ああ、このスペックでも容量が「それなら問題ありません！」足りな……本当か？」

「ええ、このＯＺと言う最高のネットワークを使った作戦です！」

第七部　全世界の人の力　第二十五章（前書き）

皆さん、こんにちは鉄コンです。今日は活動報告にも書いたとおり一気に二話書こうと思います！しかし、活動報告では約１０日って書いたのに一週間で帰ってきてしまいました（笑）

健二「何で、行く前に確認しなかったんだろう……」

佐久間「作者の無計画さが目に見える」

なんだよ、久しぶりに出てきたと思ったら、そりゃ無いんじゃないの！

夏希「良いから、早くはじめたら」

はい。

第七部　全世界の人の力　第二十五章

―ｌｏｇ　ｉｎ―

ポコンと効果音が鳴りメッセージが管理棟の目前で書かれた。

「お願いです！今、世界中の核施設があるウイルスによって乗っ取られています。私達のアバターだけでは数が足りません。お願いです！私達に力を貸してください！」

野次馬アバターは一斉に口を出す。

「何だ？誰からのメッセージだ？」

「このメッセージ、ナツキからだぞ」

「マジか！？」

―ｌｏｇ　ｏｕｔ―

侘助は感心した顔になっていた。

「なるほど、そういう手段があったか」

「ええ、以前夏希先輩がラブマシーンに勝ったのも世界の人達のおかげですから、だからもう一度と」

「タイムリミットは後、二時間だがこれなら行けるかもしれない」

そう言っている間にも早速アバターが集まってきている。一万、十万、百万と

「！？」

「何だ？急に数の集まりが悪くなってる！？」

「健二！奴が妨害してるんだ。メッセージが別の国では真逆の意味になってる！」

「そう、簡単にはやらせませんよ」

「この、最後の最後まで……」

佳主馬は怒りで拳が震えていた。

「佳主馬君！今は奴よりこっちのほうが先だ！侘助さん！佐久間！」

「了解！」

「ＯＫだ！」

１：３０：００

タイムリミットはそこまで来ている。

「うぅ……っく！できた！」

三人は一気にメッセージに掛かっていた妨害ウイルスをはずしメッセージを元に戻す。

先ほどまで行かないが数は着実に増えていっている。その数は以前夏希が預かったアバター一億五千万を超えていた。

「健二君！佐久間君！今から送られたアバターの容量で消去箱のコピーを作成する」

「「はい！」」

そう、健二が言った作戦の意味はＯＺに繋ぐ末端の容量を使い消去箱の大量のコピーを生産そして、配信することなのである。

ピ、ピ、ピ、ピ

刻々と迫るカウントダウン。健二たちの心拍数は最高に波を打っている。世界の人達は健二たちに全てを託した。

「よし！完成だ！配信開始！」

そして、一気に消去箱が配信され。

「ん？おかしい？半数しか配信されていない。まさか！？」

「だから、言ったでしょ。簡単にはやらせないとね」

「くそ！最後の最後まで」

配信を邪魔するのは百枚の暗号の扉。これを全てとくのはいくら健二でも不可能である。だが……

「佐久間！邪魔をしている暗号の扉が何処にあるのか開いて」

「おい、嘘だろ！もう1時間きってるんだぞ」
だが、健二はお構いなしに一枚目の暗号を解いていた。
「ああ、もう。分かったよ！ほら！」
健二に扉のリストを表示する。
健二はもうすでに五枚目に取り掛かっていただが、時間が足りない。
「頑張れ！」
夏希も力一杯に応援するが、時間は無情にも過ぎていく。

だが、その時健二が解いていない扉が一枚急に開かれた。
「一体誰が？」
ＯＺの管理棟の前に十数のメッセージが現れた。
「数学オリンピック優勝者だ！力貸すぞ！」
「こっちの扉は任せな！」
メッセージに書かれていた言葉は違えど内容はほとんど同じだった。

健二に力を貸すという内容だけだった。

「健二君！」

「はい！」

夏希の呼びかけに答え再び暗号に取り掛かる。

「す、凄い。十枚、十五枚、三十枚どんどん解除されていく」

「そ、そんなバカな！？」

半分に差し掛かり残り時間とうとう三十分ラストスパートに入る。

「行けーーーーーーーーーーー！！！」

「勝てーーーーーーーーーーー！！！」

現実からは夏希達の言葉がＯＺからは大量のメッセージが健二に飛び込む。

そして、健二が最後の一枚を解いた。

「侘助さん！」

「分かってる！今度こそ配信開始だ！」

一気に世界中の携帯、ゲーム機、パソコンに消去箱のデータが入る。

ーｌｏｇ　ｉｎー

ナツキが消去箱を持っている全アバターに叫ぶ。

「その、箱をあの管理棟に向けてください！」

そして、全てのアバターが消去箱を管理棟のゲートに向ける。

「ケンジ君！」

「分かってます！」

すでに、ゲートのロックも解読を始め、たった三分で終わらせてしまった。

そして、侘助はゲートが開く瞬間と同時に何かのプログラムを起動させた。

◇

～～健二達が暗号を解読している時～～

「Ｏｈ、ワビスケ、例ノプログラム見ツカッタヨ」

「本当か！？分かった今すぐこっちに転送してくれ！」

「デモ、ＯＺデモ辺境の地トカ呼バレテイル所デサ」

「辺境の地？」

「ソウナンダヨ！ガラクダバッカノ、ゴミ収集情ミタイナ所サ。悪用サレナイタメニ置イタノカモネ」

◇

「これが、インターネット創設時にバルトを倒すために作られた、プログラムだ！」

起動した瞬間管理棟の中にいたバルトが一瞬で凍り付いた。

「皆さん！消去箱を起動させてください！」

健二がそういった瞬間消去箱と管理棟から光の道ができ、そして一気にバルトを吸い上げた。

そして、バルトは完全に消去された。

第二十六章

―ｌｏｇ　ｏｕｔ―

何分かその場で呆然としていた。そして、ようやく夏希が口を開いた。

「か、か、か」

「かっっっっっったーーーーーーーーーーーー！！！！」

一斉に全員が喜びはしゃいでいた。と言っても侘助や健二はそんな風にはならなかったが。

だが、浮かれていたのは侘助も一緒だった。そして、健二も……

……のはずだったが１人浮かない顔でクレイドルを見ていた。

―ｌｏｇ　ｉｎ―

静かに大の字に倒れこんでいる、クレイドルにケンジは近づいた。

「ハハハ、負けちゃった」

「……」

「でも、正直負けるのは途中で分かってたんだ。夏希さんや健二さんがたくさんの人に力を貸した時にね。僕は結局ゲームに負けた実力差は十分にあったのにね……」

「あの、クレイドルさん。あなたは本当にゲームでこんな事をしていたんですか？僕にはどうしてもそれが嘘のように思えて仕方ないんですが……」

「！！？」

「当たってたみたいですね」

「流石は陣内　栄さんに認められた人ですね」

「僕達のことはもうすでに知り尽くしているみたいですね」

「ええ、僕は今日のために色々と調べたんですから」

「良かったら、話してもらえませんか。今回なんで事件を起こしたか」

「……」

クレイドルはゆっくりとしかし、はっきりと話し始めた。

◇

僕の父親はＯＺの生みの親の１人でした。元々ＯＺは僕の他愛も無い想像が生み出したものだったんです。
いつも苦労していてだけど、楽しみながら仕事をしていた父はいつも言っていました。
「インターネットは確かに優れているけどもっと世界の人達とつなげられないかな～」と。
そして、まだ保育園だった頃の僕がだした他愛も無いアイデアが父

には受けたみたいで世界中のトップレベルの腕を持ったプログラマー達を呼んでＯＺを作りあげました。
その後、何年も掛かりましたが苦労の甲斐あって完成全ては最高に進むはずでした。

すぐ後、父は病気で倒れてしまったんです。それをいいことにＯＺを作ったプログラマー達は父のいや僕達親子の元々のアイデアを自分達が出したように言ったんです。僕はすぐに事実を訴えましたが完全な地位を持った相手にそんな物は何も意味を成しませんでした。

僕はすぐに復讐を決意しましたが、父はそれを止めました。最後に僕に言いました。
「人のためになれたならそれで良い。俺は幸せだった」と。
僕は最後の父の意思の通りに復讐をやめてＯＺに入社して社長になろうと決意しました。
それが僕にできる父の恩返しですから。

ですが、何年かした後にＯＺ内部でウイルスをばら撒こうという企みを持った輩が出てきました。
幸い未遂でしたが、この時無くしていた復讐心を僕に蘇らせました。
そして、同時にこう思いました。
ＯＺなんてあるからいけないんだ！自分のした事に責任をつけようと

そして、今回にいたったわけです。

◇

長いクレイドルの話が終わった。いつの間にか健二以外の全員が集まっていた。

「これが全てです」

「……」

口を開くものはいなかった。いや、開けなかったと言ったほうがいいかもしれない。

「僕が生んだ夢はいつの間にか壊したいという逆の夢になってしまっていました」

「……それって夢なんですか？」

「え？」

「夢って他の誰かが喜んだり、周りの人が自分と一緒に喜んだり出来るのが夢なんじゃないんですか」

「……健二君」

「ハハハ」

クレイドルの今の笑いは相手を挑発したりバカにしたり不敵な感じをさせず純粋に笑っていた。

「健二さんは本当に良い人に出会えましたね。ねぇ健二さん？」

「はい？」

「僕にもあなたの周りにいる人達のような『つながり』ができますかね」

「……はい。大丈夫です。あなたなら大丈夫ですよ。」

ＯＺのオフィシャルポリスが来た。

「健二さん……また、会ってくれますか」

「はい！」

これで本当に全部終わった。健二は心の中でそう呟いていた。

「クレイドル。本名ボルト＝オズ　父の名はシグナル＝オズ　さっきの奴の話だと地位を奪った奴らがせめてものはなむけにとでも名前をなぞったんだろうな」

「侘助さん……」

「安心しろ、その時の事は俺も良く知ってる。証人として俺がでる。情状酌量位はしてくれるだろ」

「ありがとうございます」

「礼を言うのはこっちの方だお前らが最後まで諦めなかったら今頃世界は終わってた」

照れくさそうに頭を掻いていた。

「健二君！」

「な、夏希先輩！大声出さないでくださいよ。心臓に悪いです」

「フフフ、ごめんごめん。最高にかっこよかったよ！」

「そ、そんな。僕はただ一杯一杯で」

顔が真っ赤かになっていた。

「健二君」

「はい？」

「……」

一瞬健二には何が起きたのか分かっていなかった。頭が真っ白になるとはまさに今の健二である。

「ありがとう、健二君。私達を助けてくれた御礼だよ」

「え？えええぇえええーーーーーーー！！！？！？？」

キスされてしまったようだ。しかもあの時とは違い勢い任せじゃ無く。自分の意思でである。

「ちょ、ちょっと夏希先輩！？」

健二にはお構いなしにやってしまった夏希である。健二の耳には後ろの野次馬もとい陣内家と佐久間の声が入っていなかったのは言うまでもないであろう。

とにもかくにもこれで事件は終わったのである。

第二十六章（後書き）

こんばんは鉄コンです。いよいよあとちょっとでこのＳＵＭＭＥＲＷＡＲＳ２　新たなる脅威も完結です。と言っても後もうちょいだけあるんですけどね（笑）
それでは、あと少しですがよろしくお願いします。

最終部　終わり・・・そして

「小磯……健二か……」

クレイドルいやボルト＝オズはパトカーの中でその名前を呟いていた。

いつかまた会いたいと心のそこから願うのは彼自身、随分と久しぶりのようだ。そして、とても嬉しげだった。

◇

所変わり陣内家。ＯＺの安全を全て確認し終えたオフィシャルが健二たちの所へ報告をすませた。そして夜になり晩の食事は一際盛大に行われた。

今回の事件の全てを知ったからかＯＺの暴走を止めて喜んだという人物は１人もいなかった。いや寧ろボルトが早く警察から釈放されたらなと思う者しかいなかった。

では、なぜ盛大になっているかは……言うまでも無くさっき夏希が健二にしたことで盛り上がっているのである。当然２人は終始万助や直美、理香あたりにからかわれっぱなしだったがとにかく楽しんでいた。

宴会が終わり、健二は先に済ませて，あの人，の仏壇へ行った。だが、先客がいたようだ。夏希である。

「健二君」

「夏希先輩もここへ？やっぱり……」

「うん。今日の報告」

2人は何かを言うでもなくただ手の平を合わせて仏壇に向かい合っていた。

……2人とも、お疲れ様。また何かあったらよろしく頼むよ……

「「！！？」」

……あんたなら、できるよ……

「夏希先輩……今のって」

「健二君も聞こえた？」

少しの間2人は驚いていたが、すぐに笑顔になって心の中でこう呟いた。

「「まかせてください！」」

不思議な出来事だが2人にとって栄という人物の大きさが改めて確認できた、出来事である。

そして、2人の気持ちが一つという、再確認もできた一瞬であった。

―翌日―

「本当にありがとうね～」

「いえ、皆さんがいなかったら僕は何も出来ませんでしたよ」

「ダハハハ、そうは言ってもお前がいなかったら俺達も何も出来なかったぜ」

「そういうこと、礼を言うよ」

陣内家は健二に二度も命を助けてもらっている。そして、健二も助けてもらった。彼らは今や身内同然である。

「それじゃ、失礼します。ありがとうございました」

「また、いつでも来なさい」

三人はそうして、東京に帰って行った。こうして健二の二度目の夏は幕を閉じた。

唯一気がかかりだった、ボルトの件もＯＺの方にも責任有りと裁判が下りＯＺ創設時に関わったメンバーも何名か逮捕されたそうだ。ボルトのほうは執行猶予か刑が下ったとしても、一年程度ですむ。理一からの話である。

健二にとって非日常はあってはほしくないもの。ないのが一番なのである。だが、それが起きても周りの人達と一緒に乗り越えた時健二達の『つながり』はより強く固いものになる。ボルトにもそれを伝えたいと健二は帰りのバスで晴れ渡る空を見ながら考えていた。

そしてもう一つ思っていた。

『つながり』は人にとって無くてはならないものだと。

最終部　終わり・・・そして（後書き）

こんにちは！鉄コンです！
これでＳＵＭＭＥＲ　ＷＡＲＳ２　新たなる脅威はとりあえず終わりです。本当に読んでくれた方々にお礼を言います！ありがとうございます。
先述の通りとりあえずは物語りは終わりなんですが……あとちょっとだけ続きます。いわゆるエピローグと言うか後日談的な話ですね。それと、活動報告にも書いたとおりこの作品の次回作も作るのでそれの片鱗もちょっと出したいと思います。
それでは！

後日談

事件から数週間が経っていた。相も変わらずの生活と言った感じである。

「さてと、それじゃ先にあがるよ佐久間」

「おお、お疲れ様～」

健二と佐久間はあの事件後ＯＺから色々な依頼をうけた。依頼はコアエンジニアをして欲しいとの事だった。２人はまだ高校生でそんな大それた仕事はまだ早いと断ったが、大学を卒業してから返答してほしいとのことで一時保留となっている。佐久間はその他の仕事としてＯＺの新しいゲームやアトラクション作りの仕事を作ったりもしている。

それと、ボルトに関してはすぐに裁判が行われ当然有罪になった。だが、ＯＺを荒らした部分を修理、強化することを条件に仮釈放になった。形は有罪だが事実上無罪なようなもので仕事の誘いもいくつかあるほどだった。

「お疲れ様。健二君」

夏希はそんな２人と対照に随分とのんびりしている感じである。大学受験がもうとうに終わっているので当たり前ではあるが。

「せ、先輩ちょっとくっつきすぎですよ」

「いいの」

何がいいのか分からないがあの事件後以来さらに仲が良くなっている。見てて微笑ましいほどにだが……

「あ、健二君ちょっと忘れ物してきたちゃった。少し待ってて」

健二にとってこの待ち時間がとてつもなく怖い時間なのだ。何故なら……

ピュン！

矢が健二の隣で刺さった。弓道部のメンバーである。

「ちょ、ちょっと待ってください！話し合いましょう。話し合いましょう」

話し合ってくれるはずも無く矢はどんどん飛んでくる。そうＫＫＫ団に相変わらず追われているのだ。しかも、夏希と仲良くしている時に限ってなのである。ちなみに佐久間はもう辞めていた。（理由は１００００ｈｉｔ記念を見てください）

そんな、様子を物陰から見ていた人がいた。佐久間……ではなくなんと夏希であった。

実は夏希はＫＫＫ団があるのを知っていた。だが悪戯心からかＫＫＫ団のメンバーがいるときにべったり健二にくっついているのである。本当に危なくなったときはすぐに戻るが。

これに気付かない健二も健二であるが……。とは言っても夏希

との仲が良いのは本当なので問題は無い……はずである。

そして、逃げ切って夏希帰る道中。

「花火……ですか？」

「そう。今日近くの国立公園でやるから見に行かない？」

「もちろん行きます！」

二つ返事である。こうゆう時の健二の目は生き生きしている。

ー数時間後ー

「お待たせ～」

「あ、先輩こっちです」

「ごめんね。待たせた」

「いえいえ」

「それじゃあ行こう」

歩き出して数分何故か夏希は公園と逆方向の場所に歩いていた。そして、とあるビルの屋上に着いた。

「あの～先輩ここって？公園向こうですよ」

「いいの、ここで」

少し笑ってそういった。そして、間もなく派手な音が空に響いた。

「なるほど、穴場だったんですね」

「そういう事」

2人はしばらく見ていた。だが、健二があることに気付いた。雨も降っていないのに水滴の後が夏希の足元にあった。

「夏希先輩……？」

「ん？……あれごめんね。何故か涙が」

夏希自身涙が出ていることに気付かなかったようだ。

「前おばあちゃんと一緒に見た花火のこと思い出したのかな。あの日もこんな風に綺麗だったから」

「夏希先輩……」

「大事な人と見た物の思い出ってずっと残ると思うんだ。今私が見ているのもね」

健二がその言葉を理解したとき健二の顔が赤くなっていた。

「あの、先輩来年も一緒に来ませんか？僕も夏希先輩と一緒に見た

ら綺麗だと思うから」

最後のほうの言葉がやけに小さくなっていた。本当に恥ずかしがりやである。

「うん。約束」

それからずっと花火が終わるまで手をつないでいた。きっと一年後もまた同じ場所に来ているだろう。

約束を守るために。

……

「そうか、バルトが完全に消去されたか……」

「で、どうするんだ？」

「お前な～そんなの聞かないでも分かるだろ～このど阿呆！」

「へいへい。でもまぁいよいよ、俺たち三人もうごきだすのか」

「そういう事。無論あちらさんも動くと思うぞ」

「でもまぁ、あの人達となら行けるでしょ」

「当たり前だろ！そうじゃなきゃ何のために今回放って置いたのか分かりゃしないだろ」

「そりゃそうだな。これで勝てなかったら勝ち目はないもんな」

「ほんじゃ、２人とも行きますか」

「「あいよ」」

あとがき

はい、こんにちは鉄コンです。

まず、あとがきで最初に言っておくことはまず、僕は『小説など書いたことがない超ど素人』です。

とりあえず、何故僕が先に書いたとおりこんなど素人が小説を書くにいたった経緯を書きたいと思います。

まず、僕がサマーウォーズに出会ったのは何と情けないことに２００９年の８月じゃなくて２０１０年の３月なんですね！（苦笑）簡単に言ってしまうと劇場から見てきたファンにとって僕はにわかファンなんです。でも、そんな僕でもとても面白くどうしてもこの良い映画が終わるなんてもったいないと思ってたどり着いたのが小説と言うわけです。

元々何かのアニメが最終回になってしまうと何と言うか喪失感みたいなものがあったんです。それで、続きを思い描いてみることは何度もやったことがありました。それも、理由のひとつです

そして、そんな風にサマーウォーズ第二弾を書いてる人はいないかと思い検索してみたら。この小説をよもう、小説家になろうにあたったわけです。

執筆途中かなり大変なことが幾度と無くありました。どんな風に物語をつなげようか迷った事、更新速度を気にしていた事、参考にしていた小説が似すぎていた事、日数を空けてしまい軽いスランプになった事、バトルシーンが上手く書けなくて困った事本当に色々あ

りました。

でも、そんな中でＰＶ数が伸びてきていた事を知って嬉しく思ったこともありました。

本当に大変でしたけど、頑張って完結までいけました。

気づいてみればいつの間にか１００００００ＰＶも行っていました。
本当に読んでくれた方に礼を言います。
ありがとうございます。

そして、僕がサマーウォーズを書き始めの頃に載っていた
サマーウォーズ　その後　サマーウォーズ－冬－　ＳＥＰＴＥＭＢＥＲ　ＷＡＲＳ

この作品のおかげで随分書くのが楽になりました。作者のダイちゃんさん、Ｅｒｒｏｒさん、ホチさんありがとうございます。

特にダイちゃんさんには自分の小説の書き方まで教えていただきました。本当にありがとうございます

これで、ＳＵＭＭＥＲ　ＷＡＲＳ２　新たなる脅威は終わりですが、次回予告のような回があったとおり３を現在製作中です。それまで、よろしくお願いします。

活動報告にも書いたとおり次は魔界戦記ディスガイアの短編集のよ

うなものを作りたいと思っています。出したらまた、読んでやってください。

それでは、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0494l/

SUMMER WARS2 -新たなる脅威-

2011年1月9日06時08分発行